京都大学言語学研究 (*Kyoto University Linguistic Research*) **22**(2003), 67-117

「V-(s)aseru」の不自然な用法をめぐって

早津恵美子

0　はじめに
　0.1　問題のありか
　0.2　データの範囲
1　'-(s)ase-ru' による誤った派生
　1.1　五段活用動詞を '-sase-ru' によって派生
　1.2　使役接辞の過剰
2　語末が -ase-ru となる動詞（「～aseru」）のつくりだし
　2.1　語末が -as-u の他動詞から「～aseru」をつくる
　　2.1.0　一段活用型の使役動詞「V-(s)aseru」と五段活用型の使役動詞「V-(s)asu」
　　2.1.1　【-e-ru : -as-u】型の自他対応をなす「～asu」から
　　2.1.2　【-i-ru : -as-u】型の自他対応をなす「～asu」から
　　2.1.3　【-u : -as-u】型の自他対応をなす「～asu」から
　　2.1.4　対応する自動詞ない「～asu」から
　2.2　【-e-ru : -as-u /-ase-ru】型の自他対応からの類推で「～aseru」をつくる
3　サ変動詞「N/A-スル」から「N/A-サセル」の形をつくる
4　不自然な用法の意義
　4.1　不自然な用法の諸タイプ
　4.2　不自然な使用をうみだす要因

0　はじめに

0．1　問題のありか

動詞に使役接辞（いわゆる使役の助動詞）'-(s)ase-ru/-(s)as-u' をつけてつくられる動詞を「使役動詞[1]」とよぶとすると、「使役動詞」は、五段活用動詞には語幹に

---

[1]　「使役動詞」という術語はいくつかの意味で用いられる。日本語の「使役動詞」に限っても、たとえば「こわす、まわす、たてる」について、これらが“こわれる、まわる、た

‘-ase-ru/-as-u’を、一段活用動詞には語幹に‘-sase-ru/-sas-u’をつけてつくられる派生動詞であり、サ行・カ行の変格活用動詞「する」「くる」については、それぞれ「させる/さす」「こさせる/こさす」である。(使役接辞‘-(s)ase-ru’と‘-(s)as-u’はそれぞれ一段活用型の使役動詞(「飲ませる」「食べさせる」)と五段活用型の使役動詞(「飲ます」「食べさす」)をつくるが、本稿では2.1.0で述べる理由からこの二種を区別しない。以下では、両方の使役接辞をまとめて‘-(s)ase-ru’で表し、両方の使役動詞をまとめて「V-(s)aseru」で表すことがある。また‘-(s)ase-ru/-(s)as-u’のつかない形を「原動詞」とよぶことがある。)

「V-(s)aseru」を述語とする文は、人が他者に働きかけることによってその他者の動作を惹き起こしたり、なんらかの影響を与えることによって心理・生理状態の変化を惹き起こしたりするといった複合的な事態を表現する。たとえば次の諸例は、「太郎」「部長」が「後輩」「部下」に働きかけることによって「後輩」「部下」の〈行く〉〈調べる〉という動作を惹き起こしたり、「明夫」「監督」が「妻」「選手たち」に影響を与えて〈驚く〉〈疲れる〉という心理・生理状態の変化を惹き起こしたりする事態を表現している。

「行く」＋‘-ase-ru’⇒「行かせる」

「太郎が 後輩を 買い物に 行かせる。」〈後輩が買い物に行く〉

「調べる」＋‘-sase-ru’⇒「調べさせる」

「部長が 部下に 実態を 調べさせる。」〈部下が実態を調べる〉

「驚く」＋‘-ase-ru’⇒「驚かせる」

「明夫が 会社をやめると言い出して 妻を 驚かせる。」〈妻が驚く〉

「疲れる」＋‘-sase-ru’⇒「疲れさせる」

「監督が 特訓で 選手たちを 疲れさせる。」〈選手たちが疲れる〉

しかしながら、「V-(s)aseru」の使用の実際をみてみると、用いられ方が不自然で誤用とも感じられるものに出会うことがある。

(1)「……みなさんの連れて帰られる怪我人は全身が水ぶくれになっているということでありますから、怪我人に対しまして、より以上の苦痛を与えさせないよう御注意のほどをお願いする次第であります。……」『黒い雨』

(2) なな子と奥は襖をあいだにして含んだことばを投げあわせる。『流れる』

この下線部「V-(s)aseru」は、形態的には「与える＋-sase-ru」「投げあう＋-ase-ru」という成り立ちであり、それぞれの文の骨組みは、[みなさんが 怪我人に 苦痛を

つ”という変化を惹き起こす(cause)働きかけを表す動詞だという特徴をとらえて「使役動詞(とくに「語彙的使役動詞」)とよばれることがある。本稿での「使役動詞」は、あくまで形態的に「V-(s)aseru」の形をとるものをいう。

与えさせる］　［なな子と奥(の人) が ことばを 投げあわせる］である。しかし、これらの文は、原動詞「与える」「投げあう」の表す動作（〈怪我人が苦痛を与える〉〈ことばが 投げあう〉）を惹き起こす事態を表現しているのではない。これらで表現しようとしている事態は、例文のように「与えさせないよう」「投げあわせる」で表すのではなく、'-(s)ase-ru' のない形「与えないよう」「投げあう」で表すほうがむしろ自然である。

次の例の「V-(s)aseru」も 不自然な形である。「濡らせる」「あふらせる」には '-ase-ru' という形態が含まれているものの、「＊濡る」「＊あふる」という動詞を現代語に求めることはできないので、それらの動詞からの派生とはいえない。「濡らしたり」「あふれさせながら」のほうが自然な言い方である。

（3）菊治はひげを剃るのに、石鹸の刷毛を庭木の葉のなかに振って、雨のしずくで濡らせたりした。『母の口紅：川端康成（補・昭和)』

（4）代助は水道の栓を捩って湯呑みに水をあふらせながらいった。『それから』

実際の使用のなかには、このような不自然に（非規範的に）感じられる「V-(s)aseru」の例が少なからずある。しかしながら、不自然に思われる使用のなかには、規範的な観点からは誤用といわざるを得ないとしても、その使用を生み出した話し手の意図、あるいは、使用の背景でそれを支えている文法体系についての話し手の認識、という点で、使役表現の性質を考えるにあたって興味深く思われるものがある。

本稿は、規範からはずれた「V-(s)aseru」の使用にどのようなタイプがあるのかを形態的な面から整理し、それとともに、それらが使われたことにはどのような事情（要因）がかかわっているのかについても考えてみようとするものである[2]。不自然な用法や誤用などの要因の考察には、解釈に推測や主観がはいりこみすぎる危険性があるが、そうならないようできるだけ注意しながら試みることにする。

0．2　データの範囲

考察に用いた用例は、次の範囲で採集した実例である。

・基本資料：　小説・随筆・エッセイ・評論など計８８作品から、「V-(s)aseru」「V-(s)asu」を手作業で全例採集したもの。作品の一覧（作品名・作者名・発表年）を稿末にあげた。

2　不自然に感じられる用例のなかには、次の「寝らせる」のように、作品の性質からみて北海道地方の方言の反映であろうと思われるものがある。こういった例については、手元の資料に用例が少ないこともあり、この稿では取りあげることができない。

○監督は……秘密に自分の手下を「糞壺」に寝らせた。『蟹工船』

・補充資料(1)：　基本資料の作品以外の 印刷された小説や評論などから、全例採集でなく任意に採集したもの。

・補充資料(2)：　電子化資料から必要に応じて特定の動詞などを個別に文字列検索したもの。この電子化資料は、『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』『CD-ROM 版 新潮文庫 明治の文豪』『CD-ROM 版 新潮文庫 大正の文豪』『CD-ROM 版 毎日新聞 '95』および朝日新聞社のサイトから主要な紙面の記事をダウンロードしたものを それぞれテキストファイル化したものである。

基本資料とした用例は 約 8700 例である。本稿は、その中にみられた 不自然な「V-(s)aseru」の用例について、前節で述べた問題を考察しようとするものである。考察を行う際に 必要に応じて、補充資料(1)、補充資料(2)の用例を補充的に利用した。

引用したそれぞれの用例の最後に『　』に入れて作品名・新聞名などを示す。基本資料の用例については『金閣寺』のように作品名のみを示し、補充資料(1)(2)については作者名と時代も示し、それぞれ、『千羽鶴：川端康成（補・昭和)』、『縮図：徳田秋声（電子化・大正)』のように記す。新聞記事については、『毎日新聞 1995（電子化)』のように、新聞名と発行年を示す。

1　'-(s)ase-ru' による誤った派生

1．1　五段活用動詞を '-sase-ru' によって派生

〔1〕　次の文では、「ほころばさせる、輝かさせる、苛立たさせる、惑わさせる」という形が使われている。

（5）K君はまるまる肥えた、健康そうな白い顔を申し訳なさそうにほころばさせて、……『庭の山の木』

（6）茶室としては無論明るすぎるのだが、それが令嬢の若さを輝かさせた。『千羽鶴：川端康成（補・昭和)』

（7）順三が約束の時間に来ず、既に出来た料理を出させずに皆で待っている事は、その場合多少主人役の位置にいる父の気を苛立たさせ、癇癪を起さすには十分な事であった。『和解』

（8）寝入るまで考えていた物語の中の空想が現実に重なって来て千賀子を惑わさせた。『妖：円地文子（補・昭和)』

原動詞として「ほころぶ」「輝く」「苛立つ」「惑う」という自動詞を考えることができ、上の例はこれらからの使役表現だと考えられるが、「ほころぶ」「輝く」「苛立つ」「惑う」から「V-(s)aseru」をつくるとすれば、これらはいずれも五段活用の動

詞であるから、使役接辞としては‘-ase-ru’をつけて「ほころばせる」「輝かせる」「苛立たせる」「惑わせる」とすべきところである。

白い顔が ほころぶ ⇒ K君が 白い顔を ほころばせる
令嬢の若さが 輝く ⇒ それが 令嬢の若さを 輝かせる
父の気が 苛立つ ⇒ その事が 父の気を 苛立たせる
千賀子が 惑う ⇒ そのことが 千賀子を 惑わせる

したがって、上例で用いられている「ほころばさせて」「輝かさせた」「苛立たさせ」「惑わさせた」という形は、原動詞が五段活用であるにもかかわらず‘-sase-ru’のほうの使役接辞を用いて派生させた非規範的な形（誤用）ということになる。

こういった誤りは、古くにもあったようである。たとえば、三矢重松(1908:189～190)に、使役相の形式の「転訛」のひとつとして、「四段活動詞にサスを添ふる」という類があげられており、「読マサス 折ラサス などは誤なり」とした上で、『大鏡』の「御文いとかしこく時めかさせ給ひて」、謡曲（山姥）の「聞かさせ給へ」などの例があげられている。

このような「V-(s)aseru」が用いられる背景には、最近の、とくに話し言葉や宣伝の文句などで次のような言いまわしが使われるのに通じる心理が働いているように思われる[3]。

(9) 一生懸命やらさせていただきます。
(10) 喜んで行かさせていただきます。
(11) 会員の皆様には料金をさらに１０パーセントひかさせていただきます。

「やる」「行く」「ひく」はいずれも五段活用の動詞であるから、使役接辞としては‘-ase-ru’をつけて「やらせていただきます」「行かせていただきます」「ひかせていただきます」とすべきところである。それにもかかわらず(9)～(11)で‘-sase-ru’をつけた形が使われているのには、一段動詞や変格動詞を‘-sase-ru’によって派生させた場合の次のような形が影響していると思われる。

(12) 一生懸命つとめさせていただきます。
(13) 喜んで参加させていただきます。
(14) １０パーセント値引きさせていただきます。

一段動詞や変格動詞から派生された「V-(s)aseru」から作られるいわゆる「～テイ

---

[3] こういった言いまわしが使われることはしばしば指摘されており、「サ入れ言葉」「サ付け言葉」などといわれることがある。この名づけは、一段活用動詞を受身接辞によって派生させる際に、‘-rare-ru’をつけた形でなく‘-re-ru’をつけた形（「見れる」「食べれる」など）が用いられることがあり、それが「ラ抜き言葉」とよばれることに対比させたものと思われる。

タダク」表現には、いずれも〈サセテイタダキマス〉という形が含まれている。(9)〜(11)の話し手は、こういった謙譲的な丁寧な言い方から、謙譲の気持ちを表すのにふさわしい形式として〈サセテイタダキマス〉というまとまりを異分析的にとりだして、五段活用動詞にまで〈サセテイタダキマス〉を用いたものと思われる。

先の(5)〜(8)の例は謙譲の気持ちというのではないが、話し手の認識として、変化の惹起を明晰に表現するのにふさわしい形式として〈サセル〉が捉えられていて、それが支えとなって使われたという、相通じる言語認識をみとめることができると思われる。

ある形式の異分析的なとりだしということでは、やや古い接尾辞'-sime-ru'による派生にも、ときに似た現象がみられる。ナリ活用の形容動詞を'-sime-ru'で派生させた形は「〜ならしめる」となるはずである(「我等の道を安らかならしめる」「人民を自由ならしめる」)。ところが、ナリ活用の形容動詞からの派生であるにもかかわらず「〜たらしめる」となっている例が稀にみられる。

(15) 私は何ら斟酌なく自分を明晰たらしめようとしていたが、それが自己を理解したいという衝動から来ていたかどうか疑わしい。『金閣寺』

(16) 静かな愛の感情の代わりに技巧的な意志規定を自覚することは、人々を毫も幸福たらしめず従って人道に寄与するところがない。『風土』

(17) 最終的に東側は、自由権の重要性を認めて屈服するが、西側の人権外交を有効たらしめたのは、経済援助とのリンクだった。『毎日新聞 1995(電子化)』

(18) 小沢氏は二十七日夕、都内のホテルで記者会見し、「二十一世紀を安泰たらしめるため、改革はどうしても必要だ」と強調。『毎日新聞 1995(電子化)』

これはおそらく、文章語的な、あるいは格式ばったかたい表現にふさわしいものとして、タリ活用の形容動詞や名詞を'-sime-ru'で派生させた形(「渡良瀬の氾濫は唯もう満目をして蕭条たらしめている」「その金は人民をして乞食たらしめる運動費だ」)から、〈タラシメル〉が異分析的にとりだされたことによる誤りだと思われる。

さらに次の2例は、「髣髴(彷彿)」という、形容動詞ともいいにくい二字漢語に〈タラシメル〉をつけて用いたものである。

(19) こういうただごとならぬ事が起った場合、……優にその人命を左右し得る重要な国籍というものの正体を、彩子に髣髴たらしめるには、充分具体的な出来ごとであるのだった。『鎖』

(20) お雪は倦みつかれたわたくしの心に、偶然過去の世のなつかしい幻影を彷彿たらしめたミューズである。『墨東綺譚』

なんらかの表現的な意味合い・ニュアンスを表す形式として特定の形が異分析的にとりだされて新たな語や用法を生み出すことは、通時的にしばしばみられることである。(5)〜(14)のような〈サセル〉、(15)〜(20)のような〈タラシメル〉の使用も、起

こり得ることである。

なお、〈サセル〉を惹起の意を表す独立の形式とみなす認識については、後に第3章でサ変動詞について考察する際にもとりあげる。

〔2〕　あまりに文法的な表現も、ときに不自然に感じられることがある。

(21) 映画館を出ると夕暮れて水っぽい風が吹いていた。かれらは黙ったまま雑踏をぬってあるき、黙ったまま混みあっている電車に乗った。ほかにうまいやり方がなかった。そしてかれらのあいだにしこりがかたまり、かれらに喉をかわかさせた。『戦いの今日：大江健三郎（電子化・昭和）』

この文の「かれらに喉をかわかさせる」は、次のような派生・対応関係を考えることができ、一応 正しい用法とみなすことができる。すなわち、(21') のaにおける自動詞「かわく」には形態的に対応する他動詞「かわかす」があって「彼らが喉をかわかす」という再帰的な他動詞文 b ができる。したがって、「かわかさせる」は、この五段動詞「かわかす」に '-ase-ru' をつけた形であり、かつ構文的にも「かわかす」による文bと「かわかさせる」による文cとに対応関係が想定されると考えるのである。

(21')-a 彼らの喉が かわく　or　彼らが 喉が かわく

-b 彼らが 喉を かわかす

-c 彼らの間にしこりがかたまり 彼らに 喉を かわかさせる

しかしこの「彼らに 喉を かわかさせる」は、「彼らに 喉を かわかせる」のほうが自然だと感じられないだろうか。

(21')-d 彼らの間にしこりがかたまり 彼らに 喉を かわかせる

実際に このdのような構造の文として、次のような用例がある。それぞれの文の骨組みとともに示す。

(22) 「人民という頭のない」点で、藩閥政治家とまったく選ぶところのない「民党」政治家に、農民の直接行動を機会に、鉱毒問題を通じて、人民への責任の意識を甦えらせたいという願も田中正造にあったかもしれない。『田中正造の生涯』

（骨組み：〔正造が 政治家に 責任意識を よみがえらせる〕）

(23) 青年男女の在り方が、世のいわゆる識者たちに、ムッとノドをつまらせるようなタイプのものになった時、……『青い山脈』

（骨組み：〔青年男女の在り方が 識者たちに ノドを つまらせる〕）

この文は、「よみがえる」「つまる」という動詞（文）との派生・対応関係を考えると、実は文法的に誤った文ということになる。先の(21')と同様に考えると次のような関係が考えられるので、それぞれの c が正しい文であって、実例の構文であ

るdは正しくないということになるからである。

(22')-a 政治家の責任意識が よみがえる

-b 政治家が 責任意識を よみがえらせる

-c 正造が 政治家に 責任意識を よみがえらせさせる

-d 正造が 政治家に 責任意識を よみがえらせる

(23')-a 識者たちのノドが つまる

-b 識者たちが ノドを つまらせる

-c 青年男女の在り方が 識者たちに ノドを つまらせさせる

-d 青年男女の在り方が 識者たちに ノドを つまらせる

しかしながら、それぞれのc を正用として実例に相当するdを誤りだとするこの解釈は、あまりに“文法的すぎる”見方だと思われる。c の文はいかにも“作った文”という感じがしてむしろ不自然であり、いずれもdのほうがむしろ自然な表現に思われる。同様にして、先の(21)「かれらに喉をかわかさせた。」も、文法的に誤用だとはいいにくいが、表現としてはむしろ不自然に思われるのである。

このようなことは、一般に、いわゆる再帰性とからんでみられることが多い。つまり、再帰的な構造の使役動詞文で表される心理状態や生理状態（「親が頭を悩ませる」「子供が目を輝かせる」）を他からの原因的なかかわりよって生じさせる、という事態が表現されるときに、しばしばみられるのである。

たしかに、先の文は、原動詞による文aと使役動詞による文dとを比べてみると、両者の構文的な対応関係が単純ではない。ふつう、原動詞「V」による文と使役動詞「V-(s)aseru」による文との構文的な対応関係は次のように考えられるのだが、上のaとdはそうではないのである。

「Yが（Zを） V」－「Xが Yに/を（Zを） V-(s)aseru」

ここでみた再帰性のからむ文に限らず、原動詞文と使役動詞文との構文的な対応関係は必ずしも単純なものばかりではない。再帰性がからむ文の構文上の問題については別稿を用意したい。

1．2　使役接辞の過剰（他動詞のままでよいところに‘-(s)ase-ru’をつける）

〔1〕　動詞の語彙的な意味の中に、人（およびそれに準じるもの）の動作や状態変化を惹き起こすことを含んでいる他動詞がある。

(24) {つかいに} やる、こき使う、{感覚を} 与える、派遣する、{手伝いに} よこす、{部長室に} よびつける、{会場に} 導く、追い返す、追い払う

(25) 帰す、近づける、{二階に} あげる、{講堂に} 集める、{部屋に} 入れる、{部屋から} だす、通す、戻す、{客を車に} 乗せる、{客を車から} 降ろす、

{自宅に} 泊める、{子どもを} 起こす、おどかす、苦しめる、元気づける

(24)の「{つかいに} やる、こき使う、{感覚を} 与える」などは、たとえば「行く、働く、{感覚を} もつ」といった動詞の表す動作や状態を惹き起こす事態を表すことができ、(25)の「帰す、近づける、だす」などは、それぞれ、形態的に対応する自動詞「帰る、近づく、でる」の表す動作を惹き起こす事態を表すことができる。

「{ダレをドコに} やる」　≒“{ダレをドコに} 行かせる”
「{ダレを} こき使う」　≒“{ダレを} ひどく働かせる”
「{ダレに感覚を} 与える」　≒“{ダレに感覚を} もたせる、感じさせる”
「{ダレをドコに} 帰す」　≒“{ダレをドコに} 帰らせる”
「{ダレをダレに} 近づける」≒“{ダレをダレに} 近づかせる”
「{ダレをドコに} だす」　≒“{ダレをドコに} でさせる”

したがってこれらの他動詞は、そのまま「部下を 交渉に やる」「他人に 不快感を 与える」「業者を 身近に 近づける」のように表現することによって、動作や感情変化の惹き起こしを十分に表現できるはずである。ところが次の諸例では、そのような事態を表すものとして、当該の他動詞にさらに使役接辞‘-(s)ase-ru’をつけた形が使われている。(〔 〕内に、‘-(s)ase-ru’のない「V」でもほぼ同じ意味が表せることを示した。)

(26) もはやどこへ行ってもきらわれていたので自分の当番兵を<u>交渉にやらせる</u>だけでは彼は品物をださせることはできなかったからである。『真空地帯：野間宏（補・昭和)』　〔≒交渉にやる〕

(27 =1) 「……みなさんの連れて帰られる怪我人は全身が水ぶくれになっているということでありますから、怪我人に対しまして、より以上の苦痛を<u>与えさせないよう</u>御注意のほどをお願いする次第であります。……」『黒い雨』〔≒与えないよう〕(44 =2)

(28) こうして彼は経理室の権威をうちたてると共に御用商人をたくみに自分の身ぢかに<u>近づけさせた</u>。『真空地帯：野間宏（補・昭和)』　〔≒近づけた〕

(29) 二人には倉地という人間だけはどうかして<u>近づけさせたくない</u>と思う……『或る女(上)』　〔≒近づけたくない〕

(30) 「両方が意地の張りっくらをしてけつかるんだ。おかげでこちとらまでこんな雪ふりの夜ふけに<u>こき使わせやがって</u>、だが来たからにゃただじゃ帰らねえて。」『青銅の基督』　〔≒こき使いやがって〕

こういった「V-(s)aseru」が使われたのは、たとえ元の他動詞「Vt」が他者の動作惹起の意を含むものだとしても、話し手の気持ちとしては、単なる他動詞表現「XがYを <u>Vt</u>」よりも、使役接辞を含む形を用いた「XがYを <u>Vt-(s)aseru</u>」のほうが、“XからYへ働きかけることによってYが実際に動作を行ったり状態変化を生じた

りする”という惹起の意味あいを強く表現できるように感じられたからだろう。

なお、前節でみた「ほころばさせる」「輝かさせる」「苛立たさせる」「惑わさせる」((5)〜(8))についても、この節の類と同様の“惹起の意味の強化・明晰化”という性質をみることもできる。自動詞「ほころぶ」「輝く」「苛立つ」「惑う」に対応する、動きや変化の惹起の意を含む五段活用他動詞として「ほころばす」「輝かす」「苛立たす」「惑わす」をみとめれば、「K君が白い顔をほころばして」「それが令嬢の若さを輝かした」「そのことが父の気を苛立たし」「そのことが千賀子を惑わした」のように他動詞で表現することができ、したがって、実例の「ほころばさせる」「輝かさせる」「苛立たさせる」「惑わさせる」は、他動詞にさらに使役接辞‘-(s)ase-ru’をつけて用いた形と考えることもできるからである。規範からはずれた言い方のなされる背景にはいくつかの要因が絡み合っていることが十分に考えられる。

〔2〕 先の例のいくつかについてはまた、他動詞による表現と自動詞使役による表現((ア)〜(ウ))、三項他動詞による表現と(二項)他動詞使役による表現((エ))とが、表現に際して 混線(ある種の混淆)をおこしたものと考えることができるかもしれない[4]。

(ア)「人を 交渉に やる」+「人を 交渉に 行かせる」⇒「やらせる」

(イ)「人を 身近に 近づける」+「人を 身近に 近づかせる」⇒「近づけさせる」

(ウ)「俺たちを こき使う」+「俺たちを 働かせる」⇒「こき使わせる」

(エ)「人に 苦痛を 与える」+「人に 苦痛を 感じさせる」⇒「与えさせる」

次の例には、「お使いにやらせる」という形が使われている。

---

4 宮地敦子(1956)は、話言葉にみられる誤用のうち格助詞「ガ」に関するものについて考察したもので、そういった正しくない表現がなされることには「何らかの理由乃至は契機といったものがあらうと思はれる」とし、「話線上の混淆」「記憶上の混淆」という観点から誤用の解釈がなされている。「話線上の混淆」とは、たとえば「いかにもそれが面白く感じる」という誤用の文を、「……それが面白く感じられる」という話線と「……それを面白く感じる」という話線とが「面白く」を「なかだち」として混淆したものだと解釈するものであり、「この話線上の混淆といふ解釈は、ひとり「ガ」に関する誤用文にかぎらず、極言すれば、あらゆる誤用文に対して適用できるものであると考へる。」(p. 49)と述べられている。宮地(1956)において混淆の「なかだち」とされているのは語や語句であるが、本稿でとりあげている例においてなかだちを求めるとすればそれは語内部の要素ということになり、その点は異なっているのだが、誤用・不自然な用法の生じる「理由乃至は契機」としては似た現象である。

また、阪倉篤義(1974:25)に、四歳児の発した「きまりに合わない言い方」として、「僕がその紙切らして!」(“僕にその紙切らせて”の意)という例があがっている。この例にも、「僕がその紙切る!」と「僕にその紙切らして!」との混淆が感じられる。

(31) 私は自分の子どもたちには幼稚園のころからお使いにやらせたり、家事もどんどん手伝わせたものである。『徳川慶喜家の子ども部屋：榊原喜佐子（補・昭和）』

この文では、“子どもたちがお使いにいく”ことと“子どもたちが家事を手伝う”こととを惹き起こす使役事態が表現されており、後者については使役動詞「手伝わせた」で表現されている。したがって前者についても、意味的には、使役動詞によって「お使いに行かせたり」とすることも、他動詞「やる」によって「お使いにやったり」とすることも可能である。この文では、文中に動作主が「子どもたちには」というニ格名詞として示されていることから「V-(s)aseru」のかたちが求められ、「お使いにやる」と「お使いに行かせる」との混線によって「お使いにやらせる」という言い方になったのではないかと思われる。

次の例も不自然な「V-(s)aseru」の使用であるが、これらにも混線をみることができるかもしれない。ただし、下に示すように、もとになったと想定する「人をVt」「人をVi-(s)aseru」がいずれもそれほど自然な表現ではない。

(32)〔ゆき子の部屋でのゆき子と富岡の会話〕　「飲みたい？」「飲みたいねえ……」「そう、今夜は貴方を飲みつぶさせてやるわね……」『浮雲：林芙美子（補・昭和）』

「？人を飲みつぶす」＋「？人を飲みつぶれさせる」⇒「飲みつぶさせる」

(33) いつかはいっしょに暮したい、そばにいたいというだけの、夢のまた夢の日が、此の世では来ないかもしれないという不安危惧が、多江を、我に返させ、……『時雨の記』

「？人を我に返す」＋「？人を我に返らせる[5]」⇒「返させる」

〔3〕　ところで、上の諸例のうちいくつかについては、使役表現の複合性――「XがYにZをV-(s)aseru」が表現するのは、「X」から「Y」への働きかけ・影響づけと、それによって惹き起こされる「YにZをV」（動作・変化）の実現とい

5　「{ナニカ/ダレカガ} 人を我に返らせる」については補充資料(2)に次の2例があるが、いずれも翻訳文である。

○（彼のひとみは）ややもすれば彼の肩にかけられた小さな白い手のほうへうろついてゆく。だがその手の持主は、そんな横眼を使っていることを看破するたびごとに、たちまちその白い小さな手で軽快な平手打ちを頬に食わせて、彼を我にかえらせる。（『嵐ケ丘：エミリー・ブロンテ[田中西二郎訳]（電子化）』

○煙は消え、火は絶え、水波は収まった。異様な静寂が、殿上、殿下の人々を我に返らせた。（『剣を鍛える話：魯迅[竹内好訳]（電子化・昭和）』

う二つのできごとの複合であるということ ── という性質を勘案すると、実は誤用とはいえない可能性もなくはない。たとえば先の（26）において、「私」はだれか第三者を介して〈当番兵が交渉にいく〉ことを間接的に惹き起こした、つまり、〈誰かが当番兵を交渉にやる〉ことを「私」が惹き起こしたという事態（「私は班長に命じて当番兵を交渉にやらせた」など）を、第三者の介入を文中に明示せずに表現したものだとも考えられ、そうだとすれば、その事態を忠実に表現したものとして正しい表現ということになる。

次の「帰させる」の例はまさにそういった例であり、「野口」が「かづ」に働きかけて〈かづが車を帰す〉ことを惹き起こしたという事態である[6]。

(34) かづは車を待たせてあったのだが、野口が歩こうと言ったので、車を帰したのである。車をわざわざ帰させてまで歩こうという野口の口調には、何だか倫理的な力があったので、……『宴のあと』

しかしながら、(26) を含め、先のそれぞれの用例が使われている状況はそういった複合的な事態ではないものである。

ただし、仮に上で述べたような複合的な事態であっても、「V-(s)aseru」でなく「V」のままで表現することが、実は可能な場合がある。次のうち (35)〜(37) は、二重下線部分（「お雇いの群集を差し向けて」「幸作に頼んで」「興信所に依頼して」）によって、媒介者（すなわち「V」の動作主体）がはっきり示されているが、使役主体である主語（「長老たち」「三吉」「父」）に対する述語は、「V-(s)aseru」ではなく '-(s)ase-ru' のない「V」である。また、(38)〜(39)は、媒介者が明示されてはいないが、主語である人が直接その動作を行ったわけではなく、主語はあくまで使役主体であって、他者に依頼して あるいは 他者を使って行わせた動作であるが、述語はやはり「V」で表されている。いずれも文末の〔 〕内に示したように、「V-(s)aseru」で言いかえてもおかしくない文である。

(35) ユダヤ教の祭司長、律法学者、長老たちは、自分たちの宗教的権威が失墜するのを恐れた。……彼らはイエスの十二使徒の一人であるユダを買収し、お雇いの群衆を差し向けてイエスを捕えた。『死の思索』　〔≒捕えさせた〕

(36) 三吉は独りで山腹の墓地へ廻って見た。……その眺望の好い、静かな一区域は、父母の眠っている場所だ。幸作に頼んで作った新しい墓石は墳の前に建ててあった。『家』　〔≒作らせた〕

6　三矢重松(1908:189〜190)に、使役相の形式の「転訛」のひとつとして、次の『増鏡』の例があげられ、「「人シテ殿上人共ニ賜ハセテ」の意か、又は「タマハス」といふ四段活の使役か明ならず」としている。本稿であげた現代語の例と同様の問題である。

○水飯やうの物など若き上達部殿上人どもにたまはさせて『増鏡・おどろが下』

(37) しかし父は、ただそれだけの理由で（私達の）結婚を認めたわけではありませんでした。父は興信所に依頼して、あなたという人間を徹底的に調べました。それも一社だけではなく、三社の興信所を使って調べあげたということでした。『錦繡：宮本輝（電子化・昭和）』　〔≒調べさせました〕

(38) ｛江戸中期の豪商紀国屋文左衛門は｝危険を冒して蜜柑を江戸に運んだり、明暦の大火の際に木曾の材木を買占めたりして、巨富を得た。『家』　〔≒運ばせたり〕

(39) 京都の高瀬川は、五条から南は天正十五年に、二条から五条までは慶長十七年に、角倉了以が掘ったものだそうである。『高瀬川』　〔≒掘らせた〕

次の「帰させる」は、「私」が直接「社の車（の運転手）」に働きかけて“帰る”ことを惹き起こしたのか、宿の人を介して惹き起こしたのかはっきりしない。が、いずれにしろ、‘-(s)ase-ru’のつかない形「帰してから」で表現してもかまわない。

(40) 私は「清乃家」で待っているからと、いつにない怒りを含んだ口調で言うと、がちゃんと電話を切り、社の車を帰させてから、タクシーを拾って嵐山まで行きました。『錦繡：宮本輝（電子化・昭和）』　〔≒帰して〕

ふつうは「V-(s)aseru」で表現される複合的な事態がときに「V」でも表現され得るということには、いくつかの 広い意味での構文的な条件がかかわっている。早津恵美子(2001)でいくらか触れたが、あらためて別の稿としてまとめたい。

〔4〕　上の諸例は人に対する働きかけを表すものであったが、さらに、主語である人や物の身体部位や部分(またはそれに準じるもの)の変化を惹き起こす事態を表現するものにも、他動詞のまま表現すれば十分であるにもかかわらず‘-(s)ase-ru’をつけた形が用いられている例がみられる。この場合にも、上にみたような複合性は認め得ず、主語である人による身体部位などへの直接的な働きかけ・影響づけである[7]。〔　〕内に示すように「V」に言いかえることが可能である。

(41) 彼女は、同じ表現者であるよきパートナーに見守られながら、自分の踊りを少しでも“いい踊り”に近づけさせたいという、それだけを考えて生きている。(雑誌『和楽』小学館 2001 年 10 月創刊号：バレリーナ草刈民代氏へのインタビュー記事)　〔≒近づけたい〕

(42) 田中教師は色をなして、テーブルに身体を乗り出させた。『青い山脈』〔≒乗り出した〕

7　これらの「V-(s)aseru」(「近づけさせる、乗り出させる、垂らさせる、投げあわせる」) の‘-(s)ase-ru’のない形（「近づける、乗り出す、垂らす、投げあわす」）はいずれも他動詞であって、自動詞としてはふつう使わない。したがって、それからの派生だとは考えられない。

(43) {女たちは} 概してよく発達した大胸筋が、乳房を重いままに垂らさせておかずに、しっかりとひろい胸郭の上に保っていた。『潮騒』　〔≒垂らして〕

(44 =2) なな子と奥は襖をあいだにして含んだことばを投げあわせる。『流れる』〔≒投げあう〕

そして、次の (45)～(48) では、(41)～(44) で表現されているのと似たような状況が、原動詞（「近づける、乗り出す、垂らす、投げ合う」）によって充分に表現されている。

(45) 吟子は……服装は着流しを改め、海老茶の袴を着け素足に日和下駄という男と変らぬ身装にした。もちろん、白粉や紅は一切つけず襟元は極端にひっつめ、袖口も思いきり狭くすぼめてしまった。できるだけ男達の恰好に近づけ、女らしい感じを消そうというわけである。『花埋み：渡辺淳一（電子化・昭和）』

(46) 私はかき破るように雨戸を明けて体を乗り出した。『伊豆の踊子：川端康成（補・昭和）』

(47) 髪と眉は白かったが、口ひげのみは濡れたように黒い。それに血色がよく、紅白色といっていい顔が、だらりと肉を垂らしている。『国盗り物語：司馬遼太郎（電子化・昭和）』

(48) 映画の最後は、ふたたび京都の街。どんな経緯があったかわからないが、寅と菊が相変わらず乱暴なことばを投げ合いながら、しかし仲良く肩を並べて歩いていく。『朝日新聞 2000（電子化）』

〔5〕　物に対する働きかけの意を含んだ他動詞を‘-(s)ase-ru’で派生させ、物の状態などの変化を惹き起こすことを表現するものもある。

(49) そこからだらだらと川上にのぼれば堰があり、そのうえに青くよどんだ水が三方にわかれてひとつは樋に、ひとつはむこう岸の森のなかへ、残りは堰の口からどどんどどんと地響きをうたせてころがりおちる。『銀の匙』　〔≒うって〕

(50) それにしても、どうかして私はせっかく新調したものを役に立てさせたいと思って、……『嵐』　〔≒役にたてたい〕

これらの「V-(s)aseru」も原動詞（「うつ」「(役に) たてる」）が他動詞であるから[8]、「{水が} 地響きをうってころがりおちる」「新調したものを役に立てたい」でよ

---

[8] ここでの「うつ」には、「地響きがうつ」という自動詞表現が可能かもしれない。やや古い作品であるが、次のような自動詞用法がある。

○動悸が打つ胸を、彼は笑顔で隠した。女の子二人は、笑い返さない。『百年の預言：高樹のぶ子（電子化・昭和）』

○彼は地震が嫌である。瞬間の動揺でも胸に波が打つ。『それから』

いところである。ただ、前者については、「うって」よりも「うたせて」とするほうが“地面を響く状態にさせる、地面を音をたてる状態にさせる”という感じが強く出てくるかもしれない。また後者については「たつ－たてる」についての臨時的な自動詞・他動詞のまちがいとも考えられるし、「ものを役に立てたい（他動詞）」と「ものを役に立たせたい（自動詞使役）」との混線のようでもある。

以上、〔1〕～〔5〕でみてきた「V-(s)aseru」の使用は、「V」がそれだけで十分に変化の惹き起こしを表現できる他動詞であるにもかかわらず、その事態が複合的な事態であることをより明晰に表現したいという話し手の意図があり、そこに、惹起を明示的に表現する接辞として‘-(s)ase-ru’がふさわしいという話し手の認識がかかわって、動詞に‘-(s)ase-ru’をつけて用いたものと考えられる。

なお、上で見てきたもののうち、原動詞がサ行五段活用の他動詞（「帰す、だす、のりだす」）については、使役接辞‘-ase-ru’をつけた形が〈サセル〉を含んだ形となることから（「帰させる、ださせる、のりださせる」）、前節で取りあげた〈サセル〉の異分析的なとりだしと通じるところがある。

2　語末が -ase-ru となる動詞（「～aseru」）のつくりだし

2.1　語末が -as-u の他動詞から「～aseru」をつくる（過剰修正）

2．1．0　一段活用型の使役動詞「V-(s)aseru」と五段活用型の使役動詞「V-(s)asu」

〔1〕　使役動詞には、「遊ばせる」「買わせる」のような一段活用型の「V-(s)aseru」と、「遊ばす」「買わす」のような五段活用型の「V-(s)asu」がある。そして、両者の間に、意味的な面あるいは統語的な面での違いを一般的なものとして見いだすのはむずかしい[9]。次の (51)～(54) のａとｂは同じ原動詞からの「V-(s)aseru」と「V-(s)asu」の例であるが、意味的にも統語的にも違いはなさそうである。

(51)-a｛不就学児を｝近くの公園に連れて行って遊ばせることもあった。『障害児と教育』

-b｛校庭には｝卒業式の歌の稽古が流れて来、花子を遊ばした樟の根もとの瘤や、運動場を駈けめぐっている木の葉の渦など、すべてここに染みついているのはもの悲しい思い出ばかり、……『鬼龍院花子の生涯』

9　「V-(s)aseru」を「使役動詞（使役形）」、「V-(s)asu」を「他動詞」とする立場もあるが、このようにしたとしても、両者の意味的・統語的な違いが明らかになるわけではない。

(52)-a 女中に{着物を}買わせようという気かとあっけにとられて、じっとしている。買わせようというのはなくて、それが染物屋のエチケットのようだった。『流れる』

-b ふたりが植木を見ていると、すぐにそのまわりに寄って来て、しきりに買わそうとするのだ。『よき隣人：庄野潤三（補・昭和）』

(53)-a「さあさあ、おじさんを困らせないでくれよ、いい子だから」『聖少女』

-b「そうかそうか、君は、知っていたという立場にはなりたくない、なっては困るのだ、困らしてはすまないから、別行動でいいよ、……」『時雨の記』

(54)-a、b　こういう大質問になると、そう口から出任せに答えられない。むやみな事をいえば、すぐ父を怒らしてしまうからである。……代助は父を怒らせる気は少しもなかったのである。『それから』

一段活用型の「V-(s)aseru」と五段活用型の「V-(s)asu」との問題については、成り立ちや使用の分布、活用形（未然形・連用形・命令形）による使用状況の相違、国語辞書での扱いなども含め、稿を改めて考察しなければならないが、ここでは これまでの研究で明らかにされていることのうち、文体的な特徴、方言差などについて ごく簡単にふれておく。

まず、五段活用型の「V-(s)asu」は話し言葉に多くあらわれるとされることがある。たとえば鈴木重幸(1972)は、「つかいだてのたちばの動詞（引用者注：本稿でいう使役動詞）は、第二変化（一段活用）の動詞であるが、会話体の文体では、第一動詞化（五段化）して「～す／～さす(-as-u /-sas-u) 」となることもある。」としている。湯澤幸吉郎(1934、1944、1951、1953) にも、東京語を中心とした現代口語（明治・大正・昭和初期の音声言語・文字言語）において、使役の助動詞を下一段活用だけでなく五段活用のように用いる人が次第に多くなってきていることが指摘されている。そしてふたつの型について、「「サ五」の言い方は、 日を追うて盛んに用いられるようになって来たが、現在ではまだやはり「サ下一」を標準的な言い方と見るべきであると思う。」としていて、一段型を標準とする立場である（1953 を引用したが 1944、1951 も同趣。1934 では「サ下二」の方が「正しい形である」とする)。

五段活用の方を、おもに西の地域の方言とする見方もある。たとえば大槻文彦(1917)は、静岡・愛知・岐阜・富山などから西地域の口語において五段に活用されることがしばしば見られるとし、関東でも使うことがあるがやはり下一段活用のほうがよいとする。松下大三郎(1930)も、「正統の東京語」では下一段活用であるが「西部の言ひ方では之を四段活にも使」い、それが東京にも広まったとする。三矢重松(1908)も、西南地方に多く用いられるものだが、東京語にも交じることがあるとする。

一段活用型の「V-(s)aseru」と五段活用型の「V-(s)asu」との文体的、地域的な使

用分布の違いは必ずしも詳細に明らかにされているとはいえないが、一段活用型「V-(s)aseru」と五段活用型の「V-(s)asu」とには一般化できる意味的な違いはないこと、そして、「V-(s)asu」よりも「V-(s)aseru」のほうが、改まった・標準語的な言い方とされていることはほぼまちがいない。

〔2〕 一方、語末が -as-u である他動詞「～asu」のうち、人や物に働きかけてその変化を惹き起こすことを表すもの（「まわす、かわかす、鳴らす、じらす、遅らす、ふるわす」など）は、語末の形態においても意味においても、五段活用型の使役動詞「V-(s)asu」に近い。そしてこれらの中には、「遅らす」と「遅らせる」のように、語末が -as-u の他動詞「～asu」とともに「～aseru」形の他動詞もごく自然に用いられるものがある。「遅らす/ 遅らせる」「こじらす/ こじらせる」「{視線を/話を} そらす/ そらせる」「{肩を} ふるわす/ ふるわせる」である。それぞれの用例をあげる。

《「～asu」形の用例》

(55) わざわざ一時間以上も出発を遅らしたのに、……『赤と黒：スタンダール[小林正訳]（電子化・昭和）』

(56) 無理をして客をとったりして、いっそう病気をこじらすのではないかという不安に……『越前竹人形：水上勉（電子化・昭和）』

(57) 母おやは返事のしようがないので、そんなことを言って、話をそらそうとした。『路傍の石』

(58) {民子は} 眼にもつ涙をお増に見られまいとして、体を脇へそらしている。『野菊の墓』

(59) 田中君は頭を垂れたかと思うと、肩を震わしながら啜り泣きをはじめた。『黒い雨』

《「～aseru」形の用例》

(60) 大野は出勤を遅らせてただ大阪からの電報を待っていた。『武蔵野夫人』

(61) ふとした風邪をこじらせて肺炎を起し、……『花影』

(62) 「……風邪やいうて安心しとると、こじらせてしまう。寝てなはれ」『越前竹人形：水上勉（電子化・昭和）』

(63) 私と目が合うと、男はさりげなく視線をそらせました。そのそらせ方と男の人相が、何となく気になりました。『錦繡：宮本輝（電子化・昭和）』

(64) 半分は警戒心もおきて、かの女はそれとなく話題をそらせた。『二十四の瞳』

(65) かれは眼のまえにむっと黙りこんで煙草をすいながら視線をリノリュームの古びた床におとしている男から意識をそらせるために、……『鳥』

(66) 沖から吹き来る浜風に身をふるわせながら出島の渡しにたたずみ……、『青銅の基督』

この「遅らせる、こじらせる、{視線を/話を} そらせる、{肩を} ふるわせる」の形は、上で述べた事情、すなわち、① ある類の「-as-u」形の他動詞が語形および意味において五段活用型の使役動詞「V-(s)asu」に近いこと、② その五段活用型の「V-(s)asu」と一段活用型の「V-(s)aseru」とが意味的にほとんど同じであること、③ 文体的に「V-(s)aseru」のほうが整った言い方だとみなされていること、そういったことがあいまって、他動詞「〜asu」から「〜aseru」の形がいわば類推的につくりだされたものと思われる。「遅らせる、こじらせる、{視線を/話を} そらせる、{肩を} ふるわせる」は、すでに安定した他動詞となっているが、同じような類推的な手続きによって「〜asu」形から作られた「〜aseru」には、いまだ安定しない、不自然に感じられるものがある（「じらす⇒じらせる」「生かす⇒生かせる」「鳴らす⇒鳴らせる」など）。整った言い方にしようという意図によるいわば「過剰修正 hypercorrection」ともいえる。この節で検討しようとするのはこういった形である。

このような語形成のもととなる「〜asu」形の他動詞のほとんどは、形態的に対応する自動詞をもつものであり、その対応のタイプには三つの種類がある。【-e-ru : -as-u】型の対応をなすもの（「じれる : じらす」）、【-i-ru : -as-u】型の対応をなすもの（「生きる : 生かす」）、【-u : -as-u】型の対応をなすもの（「鳴る : 鳴らす」）である[10]。以下順に検討する。

2．1．1　【-e-ru : -as-u】型の自他対応をなす「〜asu」から

〔1〕　次のような「〜aseru」である。

(a)　さませる、　ぬらせる

(b)　ずらせる、　紛らせる、　じらせる、　{息を} 切らせる

いずれも不自然な「V-(s)aseru」であり、下のそれぞれの用例の最後に〔　〕として示すように「〜asu」のほうが自然である。ただその不自然さの程度には差があり、誤用という感じの強いもの（a 類）から、時代や個人などによるゆれにすぎないようなもの（b 類）もある。いちおう（a）と（b）に分けて示したが、截然と分かれるわけではない。

(a)

(67) お福や書生の眼を<u>覚ませまい</u>として、夫婦は盗むように家の内を歩いた。
『家』　〔≒覚ますまい〕

10　これらの動詞対はもともと、二段活用・四段活用の自動詞が先にあり、それに「-ス」がついて他動詞形が生じたと考えられているものである。そうしてできた他動詞形「〜asu」からさらに「〜aseru」形がうみだされているのである。

(68 =3) 菊治はひげを剃るのに、石鹸の刷毛を庭木の葉のなかに振って、雨のしずくで濡らせたりした。『母の口紅：川端康成（補・昭和）』　〔≒濡らしたり〕

(b)

(69) 広介はペンをおいて椅子をずらせた。『くれない』　〔≒ずらした〕

(70) ｛駒子は｝また三味線を拾い上げると、右足を折ったままずらせて、そのふくらはぎに三味線の胴を載せ、……『雪国』　〔≒ずらして〕

(71) お島は擽ったいような、いらいらしい気持を紛らせようとして、そこを離れて、子供を揶揄ったり、嫂と高声で話したりしていた。『あらくれ』　〔≒紛らそう〕

(72) お島は人に口を利くのも、顔を見られるのも厭になったような自分の心の怯えを紛らせるために、一層精悍しい様子をして立働いていた。『あらくれ』　〔≒紛らす〕

(73) 均平は……この世界以外の少し晴々した場所で遊んだ習慣があり、待合の狭苦しい部屋に気詰りを感じ、持前の放浪癖も手伝って、時々場所をかえては気分を紛らせるのであった。『縮図：徳田秋声（電子化・大正）』　〔≒紛らす〕

(74) 「また悪いことを言った。じらせるのが悪いと思って、説明しようとすると、その説明がまたあなたをじらせるような結果になる。……」『こころ』　〔≒じらす〕

(75) お国さんはなにか新しいのを買ってもらうと自慢してみせておきながらよく見ようとすれば袂へかくしたりして人を焦らせる。『銀の匙』　〔≒焦らす〕

(76) 私は二の句が継げずにいた。柏木はさんざん私をじらせてから種明しをした。『金閣寺』　〔≒じらして〕

(77) 私の肩をつかんだ柏木は息を切らせていた。『金閣寺』　〔≒切らしていた〕

(78) 鬼政もまた始終言葉は抑えていたが、その中で息を切らせながらも低く叱咤した。『鬼龍院花子の生涯』　〔≒切らしながらも〕

(79) もっと働きたいんだ。息を切らせて、汗馬のように全身を光らせて。『北帰行』　〔≒切らして〕

「さませる、ぬらせる」「ずらせる、紛らせる、じらせる、｛息を｝切らせる」は、形態的に(単に共時的なレベルで)予想される原動詞にあたる形の自動詞（「＊さむ、＊ぬる」「＊ずる、＊紛る、＊じる、＊｛息が｝切る」）が現代語にないので[11]、これ

---

[11] 「切らせる」は形態的には「切る」に‘-(s)ase-ru’のついた形であるが、「太郎が息を切らせる」に対応するものとしての「＊息が切る」という自動詞表現はない。
なお、「ずる」は「ずり落ちる」「ひきずる」という複合動詞の要素としては残っている。

らから‘-(s)ase-ru’によって派生されたとは考えられない。現代語で、「＊さむ、……」「＊ずる、……」に相当する自動詞は「さめる、ぬれる」「ずれる、紛れる、じれる、{息が} 切れる」であり、これらは形態的に【-e-ru：-as-u】型の自他対応をなす他動詞をもっており（「さめる：さます」「ぬれる：ぬらす」「ずれる：ずらす」「紛れる：紛らす」「じれる：じらす」「{息が} 切れる：{息を} 切らす」）、先の(67)〜(79)と似た事態はその他動詞によって表し得る[12]。

《「〜asu」形の他動詞の用例》

(a)

(80) 私は旦那の目をさまさないように気をつけなさいと注意してやり、蝋燭を消さずに待っていましたが、そのあいだに、ヒースクリフは服を脱ぎながら、話をつづけました。『嵐が丘：ブロンテ {田中西二郎訳}（電子化）』

(81) 「母上は」と丈部はつづけた、「今夜はすこし疲れていましたので、もうやすんでおります。でも、すぐ起してまいりましょう」赤穴はくびを振って、かすかにそれには及ばぬというしぐさをした。……赤穴は、さかなにも酒にも手をふれずに、しばらくじっと、黙っていた。それから——母親の目をさますのをおそれるかのように——声をひそめて、語りはじめた。『小泉八雲集：小泉八雲（電子化・明治）』

(82) 和代は濡らしたタオルを額にあててソファで横になっている。『コインロッカー・ベイビーズ：村上龍（補・昭和）』

(b)

(83) 先生は半分縁側の方へ席をずらして、敷居際で背中を障子にもたせていた。『こころ』

(84) 葉子はもうその筈には堪えないと云うように頭を振って、気を紛らす為に眼を開いて、留度なく動く波の戯れを見ようとしたが、……『或る女(上)』

(85) 「悪いことをした。私はあなたに真実を話している気でいた。ところが実際は、あなたをじらしていたのだ。私は悪いことをした。」『こころ』

(86) 父は、……金閣ときくと、息を切らしながら私の肩につかまってついて来た。『金閣寺』

(87) はあはあと息を切らして、男は教壇から私たちを見回した。『北帰行』

(88) 勉が出て来た。少し息を切らしていた。『武蔵野夫人』

---

[12] ここでは「さます」についても、本文で不自然な用法としてあげた(67)の「さませる」の例と同じく〔Xが Yの目を さます〕という構文の用例をあげたが、実はこの構文で用いられる「さます」はきわめて少なく、ほとんどの「さます」は「太郎が 目を さます」のような再帰的な構文での用法である。

したがって、問題にしている「ぬらせる、さませる」「ずらせる、紛らせる、じらせる、{息を} 切らせる」は、原動詞を'-ase-ru'によって派生させた形ではなく、【一段活用型「V-(s)aseru」≒五段活用型「V-(s)asu」】からの類推によって、「ぬらす、さます」「ずらす、紛らす、じらす、{息を} 切らす」から作られたものと考えられる[13]。

(a)

さめる　：　さます　→　?? さませる（＊さむ）
ぬれる　：　ぬらす　→　?? ぬらせる（＊ぬる）

(b)

ずれる　：　ずらす　→　？ ずらせる（＊ずる）
まぎれる　：　まぎらす　→　？ まぎらせる（＊まぎる）
じれる　：　じらす　→　？ じらせる（＊じる）
{息が} 切れる：　{息を} 切らす→　？　{息を} 切らせる（＊ {息が} 切る）

〔2〕　ところで、自動詞と他動詞とが形態的に【-e-ru：-as-u】という型の対応をなす動詞対は現代語にかなり多くある。上にあげた例も含めて挙げると次のような動詞対である。

(A)　荒れる：荒らす、　枯れる：枯らす、　焦げる：焦がす、
冷める：冷ます、　絶える：絶やす、　慣れる：慣らす、
逃げる：逃がす、　はえる：はやす、　腫れる：腫らす、
{鬱憤が} 晴れる：{鬱憤を} 晴らす、　冷える：冷やす、
増える：増やす、　漏れる：漏らす、　燃える：燃やす、
揺れる：揺らす

(B)　覚める：覚ます/?? 覚ませる、　濡れる：濡らす/??濡らせる

(C)　ずれる：ずらす/？ずらせる、　まぎれる：まぎらす/？まぎらせる、
じれる：じらす/？じらせる、　{息が} 切れる：{息を} 切らす/？切らせる

(D)　遅れる：遅らす/遅らせる、　こじれる：こじらす/こじらせる、
{視線/話が} それる：そらす/そらせる、　震える：震わす/震わせる

これらのうち、（A）の動詞対は、手元の基本資料と補充資料(1)のなかに「～as

13　「商品を切らす－商品が切れる」「しびれを切らす－しびれが切れる」についても「商品を切らせる」「しびれを切らせる」という言い方がありそうだが、基本資料にも補充資料(1)(2)にもなかった。ただ「堪忍袋の緒を切らせる」の例が１例みられた。

○博士も、堪忍袋の緒を切らせ、ビールの酔いもさめて蒼くなっていた。『縮図：徳田秋声（電子化・明治）』

eru」形の他動詞がみられなかったものであり、かりに「～aseru」形をつくるとすると「荒らせる、枯らせる、焦がせる、……」となり、たしかにきわめて不自然に感じられる。また、（B）の動詞対は、前節で、「～aseru」形（「ぬらせる、さませる」）がかなり不自然だとした類、（C）は、同じく前節で、「～aseru」形（「ずらせる、紛らせる、じらせる、{息を}きらせる」））がやや不自然だとみた類である。

そして（D）の対は、2.1.0 でふれたように、他動詞として、「～asu」形の「遅らす、こじらす、そらす、震わす」だけでなく「～aseru」形の「遅らせる、こじらせる、そらせる、震わせる」もあり、どちらもごく自然なものとして用いられるものである[14]。

これら（A）～(D)の動詞類を比べてみるとき、「～aseru」形の他動詞が自然なものとして認められるかそうでないかは、必ずしもはっきり区別できるわけではない。また、四つの類の間に不自然さにおいて程度差があるとしても、それが何に起因するのかも今のところはっきりしない。歴史的な推移なども考慮に入れて考察することが必要であるが、（A）類の「～asu」形の他動詞から「～aseru」形の他動詞が生み出される可能性も まったくないわけではない。

〔3〕　なお、上でみた動詞のうち、「{目を} さませる」「{息を} 切らせる」および「{刷毛を} 濡らせる」については、これらが用いられた要因として別のことも考えられる。

「{目を} さませる」についていえば、1.1 の〔2〕で述べたこと（あまりに文法的な表現がときに不自然に感じられること）に似た事情が考えられる。他動詞「さます」による表現「書生が 眼を さます」に対応する使役表現を作ろうとするとき、形式的に考えると、「夫婦が 書生に 眼を さまさせる」となる。一方「書生が 眼をさます」が「書生が （書生の）眼を さます」とでもいうべき再帰的な表現であることを考えれば、「夫婦が {書生に} 書生の眼を さまさせる」という文も考えられる。実際たしかに、前者の構文「X が Y に 目を さまさせる」の用例も、後者「X が Y の目を さまさせる」の用例もなくはない[15]。

14　国立国語研究所（1972:685）では、ここで(D)としている「おくらせる、ふるわせる」をふくめ、「おくらせる、ちぢらせる、つからせる、ふくらせる、ふるわせる、まぎらせる、にぎわせる」を、「形の上からは使役的なのに、もとの動詞との対応関係が一般の規則的なものからずれていて、独立の他動詞となっている」とし、他動詞とみとめている。

15　次の例は、いずれの構文かはわからないが、「目をさまさせる」の例である。

○このほか、目をさまさせない程度の外からの刺激が、いろいろな夢の原因になります。足がふとんからおちただけで、谷底についらくする夢を見たり、……『司令と伝令：岡

(89) 私は眠ったふりをして、寝息を大きく規則的にたてた。隣の教会堂の時計塔の鐘が三十分ごとに時刻を告げた。私に目をさまさせないようにと、彼女がそっと私の腕に手を置いたときは六時だった。『ティファニーで朝食を：カポーティ [龍口直太郎訳] (電子化)』

(骨組み：[彼女/鐘が 私に 目を さまさせる])

(90) ところが、気づいてみると、眠っていた私の眼をさまさせたのは、僧院の中庭でひいている竪琴の音でした。『ビルマの竪琴』

(骨組み：[竪琴の音が 私の目を さまさせる])

ただ、これらが自然な文かどうかは、1.1の〔2〕の例（「彼らに喉をかわかさせた」など）と同じく、必ずしもはっきりしない。再帰のからむ構文は、多様であるが、安定していないということでもある。

また、「息を切らせる」については、(77)〜(79)での「息を切らせる」とほぼ同じ意味を「息を切る」で表すこともできる。

(91) 夕飯を食っていると裏口から芳子が帰って来た。急いで帰って来たと覚しく、せいせい息を切っている。『蒲団』

(92) 母は息を切ってはいって来た。すでに涙で浸されていた顔である。『おとうと』

これが自然な表現だとすると、「息を切らせる」は、先に1.1でみた“惹起を含意する他動詞にさらに‘-(s)ase-ru’をつけたもの”（「身体を乗り出す」⇒「身体を乗り出させる」）と同じく、「息を切る」でよいところなのに‘-(s)ase-ru’をつけた誤りということになる。

「{刷毛を} 濡らせる」については、この例に限っての、ごく個別の問題かもしれないが、この文脈での意味に類似した「湿らせる」という使役動詞（「湿る+ -ase-ru」）からの影響、いわば「干渉」によって生じた形ということも考えられる。次の例の「V-(s)aseru」も不自然な例だが、それぞれの文脈での意味が、「花開かせる」「相手の顎先に握り拳をめりこませる」に近いことから干渉を受けて生じたという可能性もある。

(93) どんな娘たちの心臓をも一度は花咲かせるこの若い夢が、……『迷路：野上弥生子（補・昭和）』

(94) 船員バーで、ふとした発端で羊蹄丸時代の仲間と喧嘩になった。〈中略〉車座になっていた他の乗組員たちが私と機関士を引き離しに掛かるが、一旦乾ききった魂に放たれた炎はすぐには鎮火出来ない。機関士の顎先に握り拳を埋め込ませた。鈍い痛みが拳を伝って脳髄まで到達した。『海峡の光：辻仁成（補・昭和）』

野薫子（補・昭和）』　(骨組み：[外からの刺激が 目を さまさせる])

2．1．2　【-i-ru：-as-u】型の自他対応をなす「～asu」から

次のような「～aseru」である。

(a)　満たせる、　生かせる

(b)　飽かせる

この類も、現代語として不自然に感じられるかどうかで上のようにふたつに一応わけられる。

まず、それぞれの例をあげる。

《「満たせる」》

(95) 荷車には、一基ずつ、大鍋を積んである。その鍋にはたっぷりと油を満たせてあり、油の上には護摩でも焚くようにして薪を組みあげてあった。『国盗り物語：司馬遼太郎（電子化・昭和）』

(96) {お万阿は} やがて、銀の酒器、銀の杯、酒壺をもって帳台の中にもどった。{庄九郎}「酒を酒器に満たしなさい」「はい」{お万阿は} そのとおりにした。酒を用意してなにをするのか、たずねるすきも、庄九郎の態度はあたえない。「お万阿、杯をもつのだ」「はい」「わしが注いでやる」と、やさしく満たせてくれ、自分の杯には庄九郎は自分自身で注いだ[16]。『国盗り物語：司馬遼太郎（電子化・昭和）』

(97) いよいよ出来あがつたと云ふので、湯の代りに水を一杯に満たせ、強力なポンプを以つてその上にまた水を送ると、圧力測量機の針がくるくるとまはつた。『泡鳴五部作：岩野泡鳴（電子化・大正）』

(98) しかも宗旨に現世利益の色が濃く、これを念持すれば、仏天は浮世の諸慾を満たせてくれるという攻撃的な教えである。『国盗り物語：司馬遼太郎（電子化・昭和）』

《「いかせる（1）」　“物や事を活用する”に近い意》

(99) {人形の} 手そのものの構造や動きかたはきわめて単純である。それを生かせて使う力は人形使いの腕にある。『和辻哲郎随筆集：和辻哲郎（補・昭和）』

(100) しかしそれを止揚しつつ生かせることによって他国民のなし得ざる特殊なものを人間の文化に貢献することはできるだろう。『風土』

(101) 埴輪人形の一番の特色は眼である。あの眼が、あの稚拙な人物像を、異様に活かせているのである。『和辻哲郎随筆集：和辻哲郎（補・昭和）』

16　この引用例には、二行目に「酒を酒器に満たす」のかたちもある。

(102) とにかく氏の描くところには感情がこもっている。画面の上に芸当として並べられた線や色彩ではなくして、氏の心に渦巻くものを画面にさらけ出そうとするための線や色彩である。そうしてそこには、確かに、我々の心の一角に触れる淡い情緒が生かされている。〈中略〉柔らかで細かい静かで淡い全体の調子も、この動機を力強く生かせている。『和辻哲郎随筆集：和辻哲郎（補・昭和）』

《「いかせる（2）」　“人を生きさせる”に近い意》

(103) 「おっしゃる通りですわ。よるべのないわたくしを大切に扱って下さって、身にすぎた幸わせとよそ目には見えましょうけれど……心ひとつに包みかねるさまざまの思いが、ないわけではありませんわ。その物思いが、かえってわたくしを支えて、生かせてくれたのかもしれませんけれど……」『新源氏物語：田辺聖子（電子化・昭和）』

(104) 源氏は……夜昼、紫の上のそばを離れず、言葉もなく、祈るばかりである。あまりに深い愁嘆のために、涙も出なかった。大いなるものに対して「生かせて下さい」とひたすら、現つ心もなく、すがるしかなかった。『新源氏物語：田辺聖子（電子化・昭和）』

(105) しかし、細川藤孝には、この男をその後の乱世のなかをも生かせつづけて行った生来の勘のするどさがある。『国盗り物語：司馬遼太郎（電子化・昭和）』

《「あかせる」》

(106) いつまで見ても私をあかせないのは、仏寺の庭のうつくしさである。『寿岳文章集』

(107) ｛老人は話がうまく｝自分がその人物を実際に見しってでもいるように、その人物の容貌風姿から性格まで詳しく話し、きく者をあかせなかった。『蒼き狼：井上靖（補・昭和）』（佐藤里美 1990:167 より）

これらの「満たせる、生かせる、飽かせる」も、形態的に予想される原動詞にあたる動詞「＊満つ、＊生く、＊飽く」が現代語にないので、‘-(s)ase-ru’によって派生されたものではなく、他動詞「満たす、生かす、飽かす」から作られたものと考えられる。

みちる　：　みたす　→　?? みたせる（＊みつ）
いきる　：　いかす　→　?? いかせる（＊いく）
あきる　：　あかす　→　?　あかせる（？あく）

ただ、原動詞にあたる語が現代においてふつうに使われるかどうかは必ずしもはっきりしない。とくに「飽かせる」については、先の用例(106)(107)の『寿岳文章集』『蒼き狼』の作者にとっては自動詞「飽く」がまだ自然なものとして生きていて、それに'-(s)ase-ru'をつけた形が使われたということかもしれない[17]。「＊満つ」「＊生く・＊活く」は使われそうにないが、ある形が規範からはずれているかどうかを、現代日本語という共時態においてのみ判断するのは容易でない。

「いかせる」については、挙例にも示したが、ふたつの意味の場合をわけて考えるほうがよさそうである。まず、「いかせる (1)」の例は一人の作家（和辻哲郎）のものであるが、五段他動詞「生かす」の可能動詞としての意味合いで使ったもののように思えなくもない。次の(108)〜(109)は、別の作者の例であるが、「生かせる」が可能動詞として使われているのがよくわかる例である。

(108) 「僕は今波のりしながら考えたよ。波は運命で、人間がそれにうまくのれると何んでも思ったように気持よくゆくが、一つのり損うといくらあせ

---

[17] 「飽く」は、「飽くなき探究心」「飽かずながめている」といった使い方や、副詞「あくまで」には化石的に残っている。また、童謡の歌詞に「菜の葉に飽いたら桜にとまれ……」というのがある。湯澤(1944、1951) には、『青年』(森鴎外 1910〜1911)、『浮雲』(二葉亭四迷 1887〜1889)、『芋粥』(芥川龍之介 1916) の中で「飽きる」と「飽く」がともに使われているとして例が紹介されている。しかし、現代の共通語としては、「飽く(自・四)」にかわって近世後期ごろから江戸で使われ始めたとされる「飽きる(自・上一)」のほうがふつうであり、使役動詞としては「飽きさせる」が用いられる。

○美夜は恐らくどんな男をも飽きさせず愛されつづける女であろう。『女坂：円地文子(補・昭和)』

「飽かす」も、次のような例があるものの現代語としてそれほど活発には使われていない。

○〔梶井基次郎の〕母久子は教養ある賢夫人であった。……非常に落ちついた相手を飽かさぬ話手で、『檸檬：梶井基次郎〔解説：淀野隆三〕(補・大正)』

中型の国語辞書２７種での立項の様子を調べてみると、「みたす、いかす」はすべての辞書に立項されているのに対し、「飽かす」を立項しているのは２２辞書である（２７辞書の「飽かす」と「飽かせる」の立項の様子は次のようである。「飽かす」のみを立項：１８、「飽かす」「飽かせる」をともに立項：４、「飽かせる」のみを立項：３、どちらも立項せず：２)。そして、「飽かす」を立項している辞書のほとんどが「金/暇-に飽かして」のような慣用的な言い方を例にあげているのだが、実はこの言いまわしは「飽かせて」のほうにもみられる（「金に飽かせて買い集める」)。

「飽く」「飽かす」「飽かせる」いずれも、現代語においては慣用的な表現として用いられることがほとんどだといってよさそうである。

っても、あわてても、思ったように進むことが出来ない。賢い人だけ次の波を待つ。そして運命は波のように、自分達を規則正しく、訪れてくれるのだが、自分達はそれを千に一つも生かすことが出来ないのだ。それを本当に生かせたら大したものだって」『友情：武者小路実篤（電子化・昭和）』

(109) 「あれはどんなに印刷屋の修整工が失敗しても生きのこる顔なんだ。しかし、いくらガタロだって、ただニタリと笑っただけじゃ、見られたもんではない。春川だからこそ生かせたんだね」『巨人と玩具：開高健（電子化・昭和）』

和辻哲郎は次のように「生かす」も用いていて、それには可能の意味は感じられないので、「生かす」と「生かせる」とを、別の意味を表すものとして意図的に使い分けている（少なくともそうすることがある）のかもしれない。

(110) 塗り残された未完成の画の示唆的なおもしろさ、それを巧妙に生かすのは日本語の伝統の著しい特徴であった。『和辻哲郎随筆集：和辻哲郎（補・昭和）』

(111) とにかく氏の描くところには感情がこもっている。画面の上に芸当として並べられた線や色彩ではなくして、氏の心に渦巻くものを画面にさらけ出そうとするための線や色彩である。そうしてそこには、確かに、我々の心の一角に触れる淡い情緒が生かされている。〈中略〉柔らかで細かい静かで淡い全体の調子も、この動機を力強く生かせている。『和辻哲郎随筆集：和辻哲郎（補・昭和）』

一方、“人を生きさせる” という意味すなわち、人が生きることの惹き起こしの意で用いられている「いかせる (2)」の用例には可能動詞的な意味はない。こちらについては次のように使われている他動詞「いかす」から類推的につくられた不自然な例といってよいだろう。

(112) 自分を生かしてくれたものへの感謝がまざり合っている。『庭の山の木』

(113) 死刑確定者を、だらだら生かしておいて、……『死刑囚の記録』

(114) 失明してしまった人たちをどう食べさせていくか、生かしていくか、という問題です。『指と耳で読む』

(115) その者は、死すべきあなたがたのからだをも生かすであろう。『死の思索』

2．1．3 【-u：-as-u】型の自他対応をなす「～asu」から

次のような「～aseru」である。

{歯を} 鳴らせる、 {車を} 飛ばせる、 {喉を} かわかせる

2.1.1 の〔2〕にも述べたように、「～asu」形（五段活用）と「～aseru」形（下一

段活用）とがともに自然なものとして用いられる他動詞はかなりあり[18]、両者の意味はほとんど同じである。しかしここで検討するのは、ふつうあまり使われず不自然に感じる「～aseru」形である。使用において「～asu」形との間に意味の分化がうかがえるもの、いわば「異化作用 dissimilation」がはたらいていると思われるものもある。

鳴る　：　鳴らす　↛　？鳴らせる
とぶ　：　とばす　→　？とばせる
かわく：　かわかす　→　？かわかせる

まずそれぞれについて個別に検討する。

《「鳴らせる」》

物が“鳴る”ようにする働きかけは、「鐘を鳴らす」「ブザーを鳴らす」「ベルを鳴らす」のように他動詞「鳴らす」で表すのがふつうである。ところが、「鳴らせる」が使われている次のような例が少なからず見られる。

(116) ついに女が、痛みを訴え、歯をがちがち鳴らせて、うずくまってしまった。『砂の女：安部公房（電子化・昭和）』

(117) するとそこへ向うの街から大きい雄の河童が一匹、鼻息を鳴らせて歩いて来ました。『河童：芥川龍之介（電子化・大正）』

(118) 山本はカンカン帽に浴衣がけで、下駄をカラコロ鳴らせながらステッキを突いて暢気に歩いていたそうである。『山本五十六：阿川弘之（電子化・昭和）』

(119) 利仁が急に、鞭を鳴らせて、その方へ馬を飛ばし始めたからである。『芋粥：

18　湯澤幸吉郎(1944、1951、1953)は、明治・大正・昭和初期の東京語（音声言語・文字言語）の観察にもとづき、もともとは五段活用であるのに その時代の口語において 下一段に活用させることが多くなった動詞として次のようなものが挙げられている。（湯澤の挙げている動詞は三者の文献に出入りがあるが、いずれかに挙げられているものはすべて示した。下線は三者に共通する動詞）

浮かす、動かす、驚かす、輝かす、通わす、乾かす、くらます、すかす、滑らす、澄ます、漂はす、散らす、照らす、轟かす、飛ばす、なびかす、悩ます、鳴らす、濁らす、匂はす、走らす、響かす、減らす、降らす、揺がす、惑はす、迷わす、回らす、漏らす、湧かす、～めかす

湯澤(1944、1951、1953)には、動詞の種類についての言及はないが、これらの動詞について形態面の特徴をみると、いずれも【-u：-as-u】型の自他対応をなす他動詞である（「浮く：浮かす」「動く：動かす」など。「もらす」は、「-u」型の自動詞「もる」とともに「-e-ru」型の「もれる」もある）。なお、五段型の活用は連用形「し」と終止連体形「す」に多くみられることが指摘されており、興味深い。

芥川龍之介（電子化・大正）』

(120) 精などはむしろはしゃぎ気味で、鍔を鳴らせながら、……「五方のかまえの太刀つかい」と所作をしてみせたり、『鬼龍院花子の生涯』（他に類例1例あり）

(121) ｛太郎は｝すぐつまらなさそうに顔をそむけてライターをカチカチ鳴らせにかかった。〈中略〉｛太郎は｝夜道を歩きながら童話本を脇にかかえ、中古ライターをカチカチ鳴らせて……『裸の王様：開高健（電子化・昭和）』

(122) 北斗の星は又寒そうに、一枚岩の上を照らし始めました。絶壁の松も前に変らず、こうこうと枝を鳴らせています。『杜子春：芥川龍之介（電子化・大正）』

これらの「鳴らせる」も「鳴らす」のほうが自然だと思われるが（「歯を鳴らす」「鍔を鳴らす」）、「Nを鳴らせる」が用いられたのには、その「N」の特殊性が関係していそうである。

上の例に窺えるように、「Nを鳴らせる」と使われている場合の「N」は「歯、鼻息、下駄、鞭、鍔、ライター、枝」である。「鐘、ブザー、ベル」などについて「鐘/ブザー/ベルを 鳴らせる」と用いた例は、手元の基本資料にも、補充資料(1)、補充資料(2)にもみられない（「鳴らす」の可能形としての「鳴らせる」や命令形「鳴らせ」はある）。つまり、「鐘、ブザー、ベル」のように「鳴らす」ために作られた物について「Nを鳴らせる」と使った例はなく、「鳴らす」目的で作られたのではない「歯、鼻息、下駄、鞭、鍔、ライター、枝」などの場合に「Nを鳴らせる」が使われているのである。「Nを鳴らせる」と表現されているのは、「鳴る」のが常態ではない物に働きかけて「鳴る」のを惹き起こすという事態であり、そのことを明確に表すために「鳴らす」ではなく、'-(s)ase-ru' を含む形を用いたのではないか。そうだとすれば、上例のような「鳴らせる」は、「鳴らす」からの語形成（「～asu」→「～aseru」）というよりもむしろ、「鳴る」に '-(s)ase-ru' をつけた使役動詞らしい使役動詞だと考えるべきかもしれない。

さらに、「Nを鳴らせる」という用法には、しばしば触れてきた再帰性も関係している。すなわち、「歯、鼻息」は、人の身体部位およびそれに準ずるものであり、「下駄、鞭、鍔、ライター」は、上の例においては、いずれも主語である人の携帯物（およびその部分）であり、「枝」も、木を全体とするその部分である。

ただ、「Nを鳴らせる」の場合と同じような「N」であっても、「Nを鳴らす」が用いられている例もあり、はっきりと相補的な分布になっているわけではない。

(123) 道の真中を黒い豚の親子が鼻を鳴らしながら、うろうろしていた。『メキシコからの手紙』

(124) 奥のほうから三千代が裾を鳴らして出て来た。『それから』

(125) 蘇芳染の水干を着た相手は、太刀の鍔を鳴らして、「ふふん」と云った儘、答えない。『偸盗』

(126) それから牛乳屋が空壜を鳴らして急ぎ足に出ていった。『それから』

(127) 矢須子が風呂場の煙突の煤とりをして鎖をがらがら鳴らしていた。『黒い雨』

《「飛ばせる」》

「飛ばせる」の例は次のようなものである。

(128) 自動車を、…… 牛込、小石川、本郷と乗りでのある距離を飛ばせて行くうちにも、……『迷路：野上弥生子（補・昭和）』

(129) それは日頃見る兄ではない。いや、今し方馬を飛ばせて、一散に走り去った兄とさえ、変わっている。『偸盗』

(130) この報を、シーザーはウティカ目ざして馬を飛ばせている途中、受け取ったが……『クレオパトラ：宮尾登美子（補・昭和）』

「{車を} 飛ばす」は、「友人を迎えに駅まで車を飛ばした」「タクシーを飛ばして病院にかけつけた」などと使われ、“急いだ気持ちで、また速いスピードで、自分で運転して（あるいは、他者に運転させて）移動する”といった意味を表すかなり慣用的な用法である。これに対応する意味での「＊車が飛ぶ」という自動詞表現はない。また、「馬を飛ばせる」の場合も、「馬」が有生 animate である点が「車をとばせる」と異なるが、ここで使われている意味での「＊馬が飛ぶ」という言い方がない点は同じである。したがってこれらの「飛ばせる」は、「飛ばす」から上述の類推によって作られたと思われる。

移動の意を表すのではない「飛ばせる」の次のような例もある。これらについては、「風に髪が飛ぶ」「口笛の音(ネ)が飛ぶ」という自動詞表現が自然なものかどうか、あるいは、「飛ばす」による表現があるかどうか、いずれもはっきりしない。

(131) 闇市の十字路で、風に髪を飛ばせながら、オシゲは言った。『あすなろ物語』

(132) 次郎は、あらゆる表情が、凝り固まったような顔をしながら、左手の指を口へ含んで、鋭く二声、口笛の音(ネ)を飛ばせた。『偸盗』

さて、「飛ばせる」が使われているこういった例についてもやはり、「鳴らせる」にみられたような広い意味での再帰性をみとめることができる。すなわち、(128)〜(130)の「自動車、馬」はいずれも、主語である人がそれに乗っていて 共に移動しているのであり、(131)(132)の「髪、口笛の音」は人の身体部位およびそれに準ずるものである。（「紙飛行機を飛ばせる」「ボールを飛ばせる」といった例はなかった。）

ただし、みずから「N」を運転して移動する場合であっても「Nを飛ばせる」だけ

でなく「Nを飛ばす」も用いられ、「鳴らす」の場合と同様に、「Nを飛ばせる」と「Nを飛ばす」とが相補的に使われているわけではない。

(133) 寺石が一人で自転車をとばしてなぎさ屋に来るようになったのは、……『梅花抄』

(134) 私は、春の風を切ってプリンストンに車を飛ばした。『アメリカと私』

《乾かせる[19]》

「乾かせる」は、一人の作家（大江健三郎）の例しか手元にないが、「Nを乾かせる」の「N」は、ここでもやはり、主語である人の身体部位およびそれに準ずるものである。

(135) {黒人兵が広口瓶から山羊の乳を飲むのを見ている状況で} 僕は山羊の乳が極めて美しい液体であることを感動に唇を乾かせて発見するのだった。『飼育：大江健三郎（電子化・昭和）』

(136) 僕は兎口たちから離れ、大人たちに囲まれて話し合っている書記のところへ行った。書記は僕を、洟水を上唇に乾かせている村の子供たちと同じように全く無視して話し続け、僕の自尊心と彼への親しみの感情を傷つけた。『飼育：大江健三郎（電子化・昭和）』

(137) 僕は背後から、乾いた熱い掌で頭を押しつけられたが、振りむいて立上ろうとはしなかった。僕は斜面の子供らの遊びに顔を向けたまま、眼だけで僕の裸の臑の横にしっかり立っている書記の黒い義肢を窺った。書記さえ、ただ傍に来るだけで僕の喉を乾かせる。『飼育：大江健三郎（電子化・昭和）』

（※この例は、「Nを」は身体部位「喉」であるが、構文としては再帰ではない。）

大江健三郎の他の作品の中で使われている「乾かす」の例を調べてみると、いずれも単なる“物”である。

(138) 父は野兎や野鳥、雪のふりつもる冬には猪を撃つこと、それに罠でとらえた鼬の皮を乾かして《町》の役場へ渡すことで生計を支えていたのだ。『飼育：大江健三郎（電子化・昭和）』

(139) 「洗った後でよく乾かしておけばいいんだ。看護婦の連中が怠けやがって」と管理人は剛い毛の生えた太い掌を、手袋に突っこみながらいった。『死者の奢り：大江健三郎（電子化・昭和）』

(140) 「ゴム手袋はしっかり乾かしておかないとべとべとしてやりきれないな」と管理人はいい、艶のない、日焼けした皮膚で包まれた頑丈な首をうなだれて、手袋の中の指を執拗に動かし続けた。『死者の奢り：大江健三郎（電子

---

19 「乾かさせる」という形については、1.1の〔2〕で述べた。

化・昭和)』

大江健三郎も、先に和辻哲郎の「生かす」と「生かせる」について述べたのと同じように、「乾かす」と「乾かせる」とを、異なる意味を表すものとして意図的に使い分けることがあるのかもしれない。

以上みてきた、「鳴らせる」「飛ばせる」「乾かせる」という「～aseru」形の動詞がつくられたのには、意味の面での【一段活用「V-(s)aseru」≒五段活用「V-(s)asu」】という認識や、「V-(s)asu」形よりも「V-(s)aseru」形のほうが惹起を表現するものとして形態的に明晰で かつ規範的であるという認識がはたらいたことによると思われる。先述したように「遅らせる、こじらせる、逸らせる、ふるわせる」などが他動詞としてかなり安定しているところをみると、「～asu」形から「～aseru」形が生み出されるという語形成は、なんらかの条件のもとで今後も繰り返し行われて、その形が新たな語としてごく自然なものとなっていくことは十分に考えられる。

とくに、「鳴らせる、飛ばせる、乾かせる」類と、「鳴らす、飛ばす、乾かす」類とを異なる意味を表すものと捉えようとするいわば「異化」の要求にかなうものだとすると、そのことがさらに こういった新たな語形成を支え 促す可能性もある。

2．1．4　対応する自動詞のない「～asu」から

次のような「～aseru」である。

{気分/コトを} もたらせる、　にぎわせる

ここでみる「{気分/コトを} もたらせる」は、次節でみる「{身体を} もたらせる」(「{身体が} もたれる」と対応する) とは異なり、当該の意味で対応する自動詞としては、「＊もたる」も「＊もたれる」もないものである。これらも、「～asu」形の他動詞「もたらす」「にぎわす」から作られた形だと考えられる[20]。

もたらす　→　?? もたらせる (＊もたる、＊もたれる)
にぎわす　→　?? にぎわせる (＊にぎう)

《「{気分/コトを} もたらせる」》

(141) 里子は全部がわかる気がして、意外な事実に顔が蒼ざめた。と同時に、里

20　「{気分を} もたらす」「にぎわす」の例をあげておく。

○どうしたらわれらは正しい救いをうることができるか――。そしてそれを他の人にも<u>もたらす</u>ことができるか――。このことをよく考えたい。『ビルマの竪琴』

○放送が聞き苦しいという苦情が新聞の投書欄を<u>にぎわす</u>ことがある。『ことばと国家』

子にこの話はある満足をもたらせたのも皮肉といえた。『雁の寺：水上勉（電子化・昭和）』

(142) 自分のテンポというものがあり、それを守っているのが、天下をとったような気分をもたらせているのかもしれない。『死にたがる子：藤原審爾（補・昭和）』（佐藤里美 1990:156 より）

(143) （コンサート会場での阪神大震災の被害者へのインタビュー）「自宅が全壊し大変でしたが、音楽は本当に希望をもたらせてくれています。家族とポップスのレコードをよく聴きますし、『希望コンサート』は二回目。一人で来ましたが、リズムに乗り、ワクワクした時を過ごせました」と話した。『毎日新聞 1995（電子化）』

(144) 青学大は、エース石川を五輪アジア地区予選参加で欠く中、３連投の右腕亀谷の力投がチームに勝ち点をもたらせた。『朝日新聞 1999（電子化）』

(145) 関東地方に雷雨をもたらせた前線が……『NHK ラジオニュース 2003（補）』

《にぎわせる》

(146) ｛漱石は｝また西園寺首相の招待を断って新聞をにぎわせた。『和辻哲郎随筆集』

なお、「にぎわせる」については、「にぎわう」の使役動詞として規則的にでてくる形が「にぎわわせる」となり、語中に「わわ」という音連続ができるのを、なぜか無意識に避けようとしたということもあるだろうか[21]。

２．２　【-e-ru : -as-u /-ase-ru】型の自他対応からの類推で「～aseru」をつくる

ここで問題にするのは、次のような「～aseru」である。

あふらせる、　埋もらせる、　ふくらせる、　ちぢらせる、　｛身体を｝もたらせる、　疲らせる

これらは、「～aseru」の形ではあるが、形態的に（単に共時的なレベルで）原動詞として予想される「＊あふる、＊埋もる、＊ふくる、＊ちぢる、＊もたる、＊疲る」は現代語では使われない。また、前節の 2.1.1 でみた動詞類とは異なり、「～asu」形の他動詞「＊あふらす、＊埋もらす、＊ふくらす、＊ちぢらす、＊｛身体を｝もたらす、？疲らす」も、当該の意味では現代語において使われない[22]。とすると、次の諸

21　「味わう」の使役動詞として「味わわせる」ではなく「味わせる」を使っているのを（「秋の京都を味わせてくれる宿」）、旅行雑誌でみたことがある。

22　「ふくらす」は「ふくらし粉」という複合語には残っている。「疲らす」は、『我輩は猫

例にみられるこれらの形は、どのような事情で使われたのだろうか。

(147 =4) 代助は水道の栓を捩って湯呑みに水をあふらせながらいった。『それから』

(148) 君は君の愛する女を君の為めに山の中に埋もらせるほど……『蒲団』

(149) せっかくの遊びを邪魔されたのが不平らしく面をふくらせてもじもじしてたが、……『銀の匙』

(150) 冬にしては明るい陽ざしが庭の白梅の蕾をふくらせていた。『女坂：円地文子（補・昭和）』

(151) 「パーマネント」とは、女の髪をちぢらせる風俗をいい、……『羊の歌』

(152) 明は目をつぶったまま、窓枠にぐったりと体をもたらせながら、ときどき顔を上げ、……『菜穂子』

(153) 長話は老い衰えた父を疲らせる。その心から、半蔵は妻子や清助を誘って、間もなく裏二階を降りた。『夜明け前：島崎藤村（補・昭和）』

(154) 物価は日を追って値を上げ、近頃は簡単な食事をとるにも百三十万マルクはかかる。一度に多くのポンド貨を替えておくわけにもいかず、頻繁な銀行通いはほとほと神経を疲らせた[23]。『楡家の人びと：北杜夫（電子化・昭和）』

これらの「あふらせる、埋もらせる、ふくらせる、ちぢらせる、もたらせる、疲らせる」には、形態的に関係のある動詞として、現代語に「あふれる、埋もれる、ふくれる、ちぢれる、もたれる、疲れる」という自動詞が存在する。そしてこれらは語末が -e-ru の形である。2.1.0 の〔2〕で述べたように、同じく語末が -e-ru の自動詞のうち、「遅れる、こじれる、それる、震える」は、対応する他動詞として「～asu」と「～aseru」の二種類がほぼ同じ意味でふつうに用いられていて、[-e-ru ：-as-u/ -ase-ru] 型の自他対応をなす。

遅れる：遅らす/ 遅らせる、　こじれる：こじらす/ こじらせる、

{視線を/話を} それる：そらす/ そらせる、　震える：震わす/震わせる

こういった動詞対があることから、「あふらせる、埋もらせる、ふくらせる、ちぢらせる、もたらせる、疲らせる」の形は、【-e-ru ：-as-u/ -ase-ru】型の自他対応の

である』などに用いられているが、現代語としてはほとんど使われない。

○吾輩は十五六回はあちら、こちらと気を疲らし心を労らして奔走努力してみたが遂に一度も成功しない。『我輩は猫である：夏目漱石（補・明治）』

「もたらす」は、「人々に 幸運を/変化を もたらす」という用法はあるが、これは別義であり、「＊壁に身体をもたらす」とはいわない。

23 「疲らせる」の使用には、電子化資料においても、時代差・個人差がある。用例がみられたのは、島崎藤村２例、菊地寛１例、小林秀雄１例、翻訳テクスト７例である。

形態的な関係のうち、【-e-ru：(-as-u/) -ase-ru】という関係からの類推によって、自動詞「あふれる、埋もれる、ふくれる、ちぢれる、もたれる、疲れる」から（「？あふらす、？うもらす、……」はないにもかかわらず）、作られたものと思われる[24]。

[遅れる　：　遅らす　/ 遅らせる　]
[こじれる　：　こじらす / こじらせる　]
あふれる　：（？あふらす）　→ ?? あふらせる（＊あふる）
うもれる　：（？うもらす）　→ ?? うもらせる（＊うもる）
ふくれる　：（？ふくらす）　→ ?? ふくらせる（＊ふくる）
ちぢれる　：（？ちぢらす）　→ ?? ちぢらせる（＊ちぢる）
もたれる　：（？もたらす）　→ ?? もたらせる（＊もたる）
つかれる　：（？つからす）　→ ?? つからせる（＊つかる）

しかし、「あふらせる、埋もらせる、ふくらせる、ちぢらせる、{身体を} もたらせる、疲らせる」はやはり不自然であり、現代語としては、下一段活用の自動詞「あふれる、うもれる、ふくれる、ちぢれる、もたれる、疲れる」に‘-sase-ru’のついた形「あふれさせる、うもれさせる、ふくれさせる、ちぢれさせる、{身体を} もたれさせる、疲れさせる」のほうがやはり自然である。

《自動詞（「-e-ru」型）に‘-sase-ru’のついた使役動詞の用例》

(155) 姉が酌を買って出て、みんなに注ぎまわったが、姉の目には酒の色がよく見えず、なみなみと注ぎすぎてあふれさせては、「いやあ。いやあ。」と当惑の声をあげるのであった。『忍ぶ川：三浦哲郎（電子化・昭和）』

(156) ……喜助が人形をつくるのを見ていた玉枝は、完成した作品については、誰よりも早く感嘆の声をもらしていたのだった。このような人形を、竹神の村にうもれさせておくのは勿体ないと玉枝には思われたのだ。『越前竹人

24　ただし、ここであげる「あふらせる、埋もらせる、ふくらせる、ちぢらせる、もたらせる、疲らせる」の使用は、まだ「類推 analogy」とまではいえず、宮地敦子（1956:50）のいう「記憶上の混淆」にあたるかもしれない。宮地（1956）は、「集団に支へられた一般的類推とよぶには、まだ少しはやい、個人的な未熟な状態」であるものを「記憶上の混淆」とよんでいる。

西尾寅弥(1954[1988:162-3])のいわゆる“型としての同化力”のようなものが働いているとも考えられる。西尾(1954)には、「(自他対立の) 型の強弱とその原因」についての論のなかで、他動詞と自動詞とが形態的に対応(対立)するもののうち、対応の形態的なタイプとしては、【<－eru> (他、下一)」→ <aru> (自、ラ四)】という対応を示す動詞対が多くあって優勢であり（「あてる-あたる」「かさねる-かさなる」「きめる-きまる」など)、それゆえ、この型の動詞対がさらに増えていきそうな可能性があると述べられ、その原因として、“型としての同化力”があげられている。

形：水上勉（電子化・昭和）』

(157) ホテル側の関係者は「うちは損失補てんを要求せず、60億円の損失もかぶった。ところが山一はホテルの口座でさらに損失を膨れさせた」と話している。『朝日新聞 1997（電子化）』

(158) 福岡ドームの人工芝は、……硬めの感触で「ボールの自然な転がりを意識してつくった」という。芝は縮れさせて、選手の足を滑りにくくしている。『朝日新聞 1999（電子化）』

(159) この若い奥さまは、もはや周囲にはびこっている投げやりな気持に同化してしまわれたのです。かわいらしかった顔も青ざめてものうげになり、髪も縮れさせず、巻髪はなよなよと、下までたれているのもあり、無造作に頭に巻きつけたのもあるというふうでございました。『嵐が丘：ブロンテ｛田中西二郎訳｝（電子化）』

(160) 「ワトスン君、この事件をどう思うね？」ホームズは椅子の背にからだをもたれさせながらいった。『シャーロック・ホームズの冒険：ドイル｛延原謙訳｝（電子化）』

(161) 青い潮の反射は直に人を疲れさせた。三吉は長く立って見てもいられないような気がした。正太を誘って、復た歩き出した。『家』

(162) 草の間を火山礫が平らかに埋めた道は、うっすら水がたまって、靴で快く蹴立てられたが、赤土の登路はよく滑って、飢えそして大抵は脚気にかかっていた、兵士達の膝を疲れさせた。『野火』

3　サ変動詞「N/A-スル」から「N/A-サセル」の形をつくる

〔1〕　「勉強する」「出発する」「カットする」「カーブする」「まっすぐにする」「明るくする」のように、名詞的な二字漢語や外来語、あるいは形容詞（形容動詞も含む）に「スル」がついてサ行変格活用する動詞がある。ここではこれらサ変動詞にかかわる不自然な例を観察する。

サ変動詞を「N/A-スル」、その使役動詞を「N/A-サセル」と記すとすると、次の「N/A-サセル」は〔　〕内のように「N/A-スル」の形で充分に惹起の意味を表現できる。

(163) 今度の爆弾は植物や蝿などの生育を助長させ、……『黒い雨』　〔≒助長し〕

(164) 監督や雑夫長らが、漁期中にストライキのごとき不祥事を惹起させ、製品高に多大の影響を与えたという理由のもとに、……『蟹工船』　〔≒惹起し〕

(165) 連邦政府が白黒差別撤廃を強力に推進させようとしているのも、……『アメリカと私』　〔≒推進しよう〕

(166) 何より加恵を有頂天にさせていたのは、於継が……働きものの加恵を……自慢していることであった。『華岡青洲の妻：有吉佐和子（補・昭和）』　〔≒有頂天にしていた〕

(167) 体内から広がる悪寒のような冷気がひたひたと波打ち、私の躯を冷たくさせていた。『北帰行』　〔≒冷たくしていた〕

(168) 明子は侮辱のために顔を真っ赤にさせた。『くれない』　〔≒真っ赤にした〕

サ変動詞「N/A-スル」に他動詞用法があって「Xを N/A-スル」でよいにもかかわらず「XをN/A-サセル」が使われているのだから、これらは、1.2 でみたのと同じく、使役接辞による過剰な派生ということになる[25]。

しかし、サ変動詞には、自動詞としても他動詞としてもごく自然に使えるもの、自動詞なのか他動詞なのかが決めにくいもの（個人によりあるいは時代によってゆれるもの）が少なくない[26]。たとえば「実現する」は、(169)(170)では「Xが～」という自動詞的な文脈で「実現する」と「実現される」とが用いられ、(171)(172)では「Xを～」という他動詞的な流れで「実現する」と「実現させる」とが使われている。「実現する」は、自動詞としても他動詞としてもごく自然に使い得る動詞である。

(169) まえにぼくは、未紀への愛を、アメリカ行きが実現するかどうかできめようとしていたが、……『聖少女』

(170)「いくら理想だってそりゃ駄目よ。その理想が実現される時は、細君以外の女という女がまるで女の資格を失ってしまわなければならないんですもの」『明暗：夏目漱石（電子化・明治）』

(171) 自分の個人的な野心を実現することが許された。『個人主義の運命』

(172) とうとう自分の主張を実現させたのであるが、……『青い山脈』

「完成する」「展開する」についても、これらに他動詞用法があるとみなす人は次のaのような文を、自動詞用法があるとみなす人はbのような文を、どちらの用法も

25　「N/A-スル」のうち「形容詞・形容動詞＋サセル」のほうについては、「形容詞・形容動詞＋ナル」「形容詞・形容動詞＋ナラセル」との関係も考える必要がある。「寒気で体が冷たくなる」「恥ずかしさで顔が真っ赤になる」という自動詞文に対する使役表現として、「ナラセル」を用いた「？寒気が体を冷たくならせる」「？恥ずかしさが顔を真っ赤にならせる」はあまり使われず、その代わりのようにして、「寒気が体を冷たくする/させる」「恥ずかしさが顔を真っ赤にする/させる」が用いられるからである。別稿で考察したい。

26　国立国語研究所(1971)の［Ⅲ. 他動詞か自動詞か決めにくい語の用例］に、「辞典によって自動詞・他動詞の注記がまちまちなもの」として、12 種類の辞典について調べた結果が示されているが、そこにあげられている 832 動詞のうち約 74 パーセントがサ変動詞（漢語サ変動詞、外来語サ変動詞）である。

あるとみなす人はaもbも正しいと、それぞれ判断することになる。

(173)-a 括弧の中に適切な助詞を入れて、文を完成しなさい。

-b 括弧の中に適切な助詞を入れて、文を完成させなさい。

(174)-a 陸軍は南方地域に部隊を展開した。

-b 陸軍は南方地域に部隊を展開させた。

このようなゆれは、実際 次の諸例にもうかがえる。(179)には、ほとんど同じ文脈で二つの形が用いられているが意味の違いは感じにくい。

(175)-a セザンヌももうおのれの様式を完成しつつあった。『風土』

-b こうした状態が続けば、煉瓦も買えて、村の大工を雇い、自分たちも手伝って、家を完成させることができるのに、『ルーマニアの小さな村から』

(176)-a ヴェーバーがその「現世拒否」の問題をさらにどのように展開していったか、……『社会科学における人間』

-b 新しい時代の認識論の問題にまで思索を展開させていった思想家に、中井正一がいる。『図書の分類』

(177)-a {反対派の人々は} この機会を利用して大学教授の任務としての教育、その重要性を確立しようと思っていた……『若き数学者のアメリカ』

-b 産業革命では……資本主義の社会体制を確立させた。『社会科学における人間』

(178)-a {それは} 歴史を一変するような変化の時代であった。『日本文化と個人主義』

-b 社会は日増に進歩する。電車は東京市の交通を一変させた。『蒲団』

(179)-a, b それはぼくの存在の構造を一変するような危機ではなく、したがってまた、それを光のなかへひきだすことでもう一度ぼく自身の存在の構造を一変させるというようなドラマなしに、……『聖少女』

しかしながら、はじめにみた(163)〜(168)の元動詞「N/A-スル」は、いずれも他動詞用法しかなく自動詞用法はなさそうである。

(163)' *生育が助長する　　(164)' *不祥事が惹起する

(165)' *撤廃が推進する　　(166)' *加恵が有頂天にする

(167)' *体が冷たくする　　(168)' *顔が真っ赤にする

このことのために、(163)〜(168)の「N/A-サセル」は、自動詞からの使役動詞だとはみなしにくく、1.2 でみたのと同じような、他動詞にさらに過剰に使役接辞をつけた不自然な使用と感じられるのだろう。ただ、不自然さは、1.2 の諸例の場合よりも弱い。次のような例についても、「XヲN/A-サセル」を自然だと感じるか、「XヲN/A-スル」のほうが自然だと感じるかは人によって異なりそうである。

(180) 同じ大きさの正五角形を、一二枚、辺と辺とで接合させると、正一二面体ができる。『死の思索』

(181) ギリシア的な考えかたと、キリスト的な考えかたを対比させる意味で、……『死の思索』

不自然だと感じられることがあるにもかかわらず「N/A-サセル」という形が使われるのは、「N/A-スル」という単純な形では変化を惹き起こすことの表現として物足りなく感じられ、惹起の意味を明晰に表現する・強調添加するために〈サセル〉を含んだ形が選ばれたのだろう。

〔2〕　〈サセル〉を惹起の意を表す独立の形式とみなす認識、〈サセル〉のもつ語形成力は、ときに次のような形式をも生み出す。

二字漢語のうち、ふつう〈スル〉をつけてサ変動詞として用いることはなさそうなものに〈サセル〉をつけて用いた例である。次の下線部は「〈二字漢語〉＋〈サセル〉」の形であるが、「＊持久する、？群集する、？均衡する」というサ変動詞はあまり使われない[27]。

(182) 情愛のしめやかさは単に陰鬱に沈んだ感情の融合ではなくして、横溢する感情を変化においてひそかに持久させたものである。『風土』

(183) インドの芸術家がその構図中に豊富なる生物のあらゆる形を群集させるのは、あらゆる生物の統一を象徴するためでもある。『風土』

(184) 現代の人類が生物としてこのレヴェルに生き、個体と種族の維持をこのレヴェルで均衡させている以上、当面、これを根本から否定することはむずかしい。『日本文化と個人主義』

また、「？洗練させる」もややかわっている。

(185) もしも歌が、桜や賀茂の祭りのように高度に抽象化された風物を詠みこんで、その様式美を洗練させ、茶道や華道のように型の蘊奥を究める道を歩んでいたのなら、……『北帰行』

「洗練」という漢語は、補充資料(2)のなかに 162 例みられるが、そのうち 135 例が「洗練される」「洗練せられる」という受身動詞としての使用であって、そうでは

27　「持久」「群集」「均衡」という二字漢語が補充資料(2)の中で使われている様子を調べてみると次のようであり、名詞および合成名詞の要素としての用法がほとんどで、動詞としての用法はきわめて少ない。

「持久」138 例。動詞 0 例。すべて名詞および合成名詞の要素（「持久力」75 例、「持久戦」35 例、「持久走」20 例、など）。

「群集」199 例。動詞 3 例。他はほとんどが名詞および合成名詞の要素。

「均衡」902 例。動詞 68 例。他はほとんど名詞および合成名詞の要素（「不均衡」203 例）。

なお、「群集」の動詞用法 3 例はいずれも原動詞「群集する」、また、「均衡」の動詞用法 68 例は、「均衡する」が 36 例、「均衡させる」が 31 例、「均衡される」が 1 例である。

ない動詞の例は次の１例のみであり、「洗練する」という形での使用が不安定なことをうかがわせる。（ほかには、名詞およびそれに準ずる用法 17 例、「洗練さ」4 例、その他５例）

(186)「GMはもともと終身雇用の考え。それを洗練したということだ。従業員は不安がなくなり、企業側は安定した雇用が得られる。今後数年、多くの年配者が退職していくので、年齢構成が偏る心配もない」『朝日新聞 1999（電子化）』

上の(185)の「洗練させる」は、受身動詞と使役動詞とが、擬似的な自他対応をなしているかのような使い方である[28]。

(185')　「様式美が　洗練される」 ── 「歌が　洋式美を　洗練させる」
（「様式美が 高まる/きわまる」 ── 「歌が 洋式美を 高める/きわめる」）

いずれにしろ、こういった「N/A-サセル」は、「N/A」が表す動的あるいは静的な事態を惹き起こすことを他動的に表現しようとして、かりに「N/A-スル」という自動詞が無いとしても、「N/A」に直接〈サセル〉をつけて、他動詞に相当する動詞として用いたものと思われる。〈スル〉ではなく〈サセル〉を用いたのは、自動詞用法もある〈スル〉（「音がする」「変な気がする」など）よりも〈サセル〉のほうが、惹起を表す他動的な形式としてふさわしいという認識がはたらいたからだろう。

次の「手曳きさせる」「屋鳴りさせる」も、「？手曳きする[29]、？屋鳴りする」は現代語の動詞として安定していない。

(187) 春琴は我を張り通し……又いつの間にか平気な顔で佐助に手曳きさせながら稽古に通っていた……『春琴抄』

(188) 波十郎が家の中に駆けこんで来て、次いで野猪が荒れ狂うように、屋鳴りさせて家の中を走り回るのを……『夜の橋』

「手をひかせて」「屋を鳴らせて」などとの混線とも考えられるが、むしろ、使用を支える認識として上の諸例におけると似たものがあって、「手曳き」「屋鳴り」とい

28　サ変動詞ではないが、次のような「結ばせる」も当該の意味では「結ぶ」による文と対応せず、「結ばせる」と「結ばれる」とが自他対応に似た対応をしている。

〔 二人が 結ばれる ーー 彼が 二人を 結ばせる 〕

○彼が左山町介と英子を結ばせることにある役割を勤めたことが、二人のために果してよかったか、どうか、……『あすなろ物語』

○「東京の娘から、ぜひお二人を結ばせてやってくれって脅迫状が来てますの。……」『潮騒』

29　ここで用いられている「手曳きさせる」は、物理的に「佐助が春琴の手をひく」ことの惹起であり、この意味では「手びきする」とはいえない。派生的な用法としての「犯人を手びきする」「犯行を手びきする」などは現代語でも用いられる。

う名詞的な要素に直接〈サセル〉をつけて用いたものと考えられる。

こういった、「持久させる、群集させる、均衡させる」「手曳きさせる、屋鳴りさせる」は、「N/A-サセル」に対する原動詞「N/A-スル」が存在しないあるいはあまり使われないものなのだが、各々の用例のその文脈において、それぞれの事態の表現としてむしろふさわしい形である。かりに「N/A-スル」がないとしても、これらの「N/A-サセル」は誤用ではなく、既存の他動詞では表現できない意味を表現する他動詞として、すでに正しく機能しているといってよい。

4　不自然な用法の意義

4．1　不自然な用法の諸タイプ

以上この稿では、現代日本語として不自然で誤用とも感じられる「V-(s)aseru」の使われ方について、0.2 で 基本資料とした 88 作品の用例を中心に、補充資料も参考にしつつ、考察を行った。それぞれの節でみてきた不自然な使用のタイプを簡単な例とともに示すと次のようになる。(各例の末尾の〔　〕に自然だと思われる形を示した。)

1　'-(s)ase-ru' による誤った派生

1.1　五段活用動詞を '-sase-ru' によって派生

K君が 白い顔を ほころばさせる。　〔⇒ほころばす〕

一生懸命 やらさせていただきます。　〔⇒やらせて〕

二人の間のしこりが かれらに 喉を かわかさせる。　〔⇒かわかせる〕

1.2　使役接辞の過剰

みなさんが 怪我人に 苦痛を 与えさせる。　〔⇒与える〕

田中が テーブルに 身体を 乗り出させる。　〔⇒乗り出す〕

2　語末が -ase-ru となる形（「～aseru」）のつくりだし

2.1　語末が -as-u の他動詞から「～aseru」をつくる

2.1.1　【-e-ru : -as-u】型の自他対応をなす「～asu」から

菊治が 刷毛を 雨のしずくで 濡らせる。　〔⇒濡らす〕

ぼくの説明が あなたを じらせる。　〔⇒じらす〕

2.1.2　【-i-ru : -as-u】型の自他対応をなす「～asu」から

庄九郎が お万阿の杯に 酒を 満たせる。　〔⇒満たす〕

仏寺の庭が 私を あかせない。　〔⇒あきさせない〕

2.1.3　【-u : -as-u】型の自他対応をなす「～asu」から

女が 歯を 鳴らせて うずくまる。　〔⇒鳴らして〕

弟が 兄の家まで 自動車を 飛ばせて行く。　〔⇒飛ばして〕

2.1.4　対応する自動詞のない「～asu」から

その話が 里子に ある満足を もたらせる。　〔⇒もたらす〕

漱石が 首相の招待を断って 新聞を にぎわせる。　〔⇒にぎわす〕

2.2　【-e-ru : -as-u /-ase-ru】型の自他対応からの類推で「～aseru」をつくる

代助が 湯呑みに 水を あふらせる。　〔⇒あふれさせる〕

長話が 老いた父を 疲らせる。　〔⇒疲れさせる〕

陽ざしが 庭の白梅の蕾を ふくらせる。　〔⇒ふくらませる〕

3　サ変動詞「N/A-スル」から「N/A-サセル」の形をつくる

爆弾が 植物の生育を 助長させる。　〔⇒助長する〕

明子が 侮辱のために 顔を 真っ赤にさせる。　〔⇒真っ赤にする〕

芸術家が 構図中に 生物のあらゆる形を 群集させる。

盲目の春琴が 佐助に 手曳きさせながら 稽古に通う。

（この最後の２例は、前節のおわりに述べたように このままでよいと思われる形である。）

この分類は、主として、「V-(s)aseru」の形をうみだした形態的な手続きによって分けたものであるが、規範からはずれたこういった使用は、まったくでたらめに何の要因もなく起こるものでは、おそらくない。本稿で観察の対象としているのはほとんどすべて、印刷され公表されている書き言葉であるから、話し言葉において無意識に使われそのまま聞き流される整わない使用とはちがって、そこには反省的な見直しの働く余地がある。書き手自身の推敲、あるいは出版されたものならば編集者などの目が通されることによって、あまりに非文法的であったりわかりにくかったりする表現は整えられるのがふつうである[30]。そういった過程を経たであろうものになおも残っ

30　有島武郎『或る女』に次のような「わかせる」が使われている。

○そんな事を思うと葉子は憂鬱が生み出す反抗的な気分になって、湯をわかせて入浴し、寝床をしかせ、最上級の三鞭酒を取りよせて、したたかそれを飲むと前後も知らず眠ってしまった。『或る女(上)』

この場面は、「葉子」が他者（宿の人）の「湯をわかす」動作を惹き起こしたのであるから、他者に行わせたという媒介性をはっきりさせるものとしては、「V-(s)aseru」の形（「わかさせて」）のほうがよさそうで、「わかせて」は不自然に思われる。この箇所は実は、諸本のあいだに異同がある。新潮文庫の『或る女(上)』（平成３年10月25日71刷［昭和23年５月15日初版、昭和42年11月５日29刷改版］）や新潮社『日本文学全集19 有島武郎』（昭和37年８月20日初版）では「湯をわかせて」となっているが、同じく新潮文庫の新しい版である

ている不自然な用法というのには、それなりの理由があると思われる。書き手を規範からはずれた使用に導き、しかも読み手にその使用をそれほどおかしく感じさせないだけの要因が、それぞれの使用にかかわっているということだろう[31]。

4．2　不自然な使用をうみだす要因

〔1〕　今の段階では、不自然な使用をうみだす要因の種類や数について成案は得られないし、また、ひとつの不整用法がひとつの要因のみによって生じているわけではもちろんなく、複数の要因が複合的にかかわっていると思われる。今のところ次のような要因が考えられそうだということを、「日本語のとくに動詞の性質についての話者の認識」と「発話に際しての話者の意図」というふたつに分けて、箇条書き的にあげてみる。なお、要因と考えられるもののなかには、不整用法のかなり多くにかかわってその使用を支えていると思われるものと、それにかぶさって特定の用例に個別にかかわっていると思われるものとがある。後者については、それぞれの要因のところに簡単な例をあげることにする。

◆日本語のとくに動詞の性質についての話者の認識

○ 形態面での使役動詞らしさの認識。すなわち、'-(s)ase-ru' を含んだ「V-(s)aseru」の形であること、いっそう明示的には〈サセル〉という形を含んでいることが、惹起の意味を表すのにふさわしい形式であるという認識。

○ 下一段活用の使役動詞「V-(s)aseru」と五段活用の使役動詞「V-(s)asu」と

『或る女』(平成14年5月25日7刷［平成7年5月15日初版］)やCD－ROM版『新潮文庫の100冊』では「湯をわかさせて」となっている。著者（有島武郎）は発表当時どのように表現していたのか、気にかかるところだが、柴田勝二氏（東京外国語大学外国語学部：日本近代文学）のご教示によると、この小説が最初に単行本になったのは、大正八年三月だそうで（叢文閣出版『有島武郎著作集』第八輯)、その26刷（大正8年）をみせていただくと、「湯をわかさせて」となっており、昭和四年の新潮社『有島武郎全集』第二巻でも「わかさせて」である。著者が「わかさせて」としていたものが、あるとき（少なくとも昭和二十三年版に）何かの事情で「わかせて」になりかなり長い間そのままになっていたものが、平成七年版に際して原作に近い版と照らしあわされて「わかさせて」に改められたということだろう。

31　シャルル・バイイ(1935[1974:33])は、「不正用法、すくなくとも純正論のばり雑言に抵抗して生きながらえる不正用法は、たいていのばあい、一般的には言語活動の、特異的には一特有語の、根深い傾向から出ているのである」という。「V-(s)aseru」の不自然な使用にもあてはまると思われる。

が一般的には同じ意味を表現し、かつ文体的に「V-(s)asu」よりも「V-(s)aseru」のほうが、整った規範的な形であるという認識。

○ すでに存在する形態面でのパラディグマティックな体系性の認識。ここではとくに、【-e-ru : -as-u / -ase-ru】型の自他対応をなす動詞群（「遅れる：遅らす/遅らせる」）の認識。

（ 2.2 の「湯呑みに水をあふらせる」「長話が老いた父を疲らせる」など）

○ サ変動詞の自他のゆれ・動詞としての不安定さからくる、「N/A-サセル」を「N/A-スル」よりも惹起の意味を表すのにふさわしいとする認識。

（ 3 の〔1〕の「植物の生育を助長させる」「加恵を有頂天にさせる」、〔2〕の「横溢する感情をひそかに持久させる」「ふたつの事を均衡させる」など）

○ ある言語形式が特定の待遇的あるいは文体的性質をもつことの認識。

（ 1.1 の「一生懸命やらさせていただきます」にうかがえる、〈サセテイタダキマス〉を謙譲の気持ちを表す形式だととらえる認識。 1.1 の〔1〕でみた「幸福たらしめる」「彷彿たらしめる」にうかがえる、〈タラシメル〉を文章語的な形式だとする認識）

○ 広い意味での再帰的な構造の文。これは表現する事態の性質でもあるが、1.1 の「かれらに喉をかわかさせる」、1.2 の「テーブルに身体を乗り出させる」、2.1 の「左足を少しずらさせる」「書生の目をさまさせる」「歯を鳴らせる」、3 の「顔を真っ赤にさせる」など、少なからぬ用例が再帰性のからむ文である。

◆発話に際しての話者の意図

○ 希薄になりそうな、あるいは すりきれそうな[32]“惹起”の意味を維持・強化し、より明晰に表現しようとする話し手の意図。

○ 類似しつつも異なる形態によって、異なる意味を表現しようとする異化の意図。

（とくに、2.1.3 の「鳴らす」と「鳴らせる」、「飛ばす」と「飛ばせる」などにうかがえるが、2.1.2 の「生かす」と「生かせる」にもその可能性をみた。）

○ なんらかの文体的特徴を帯びた表現をしようとする意図。たとえば、(a) 格式ばったかたい表現に、(b) あくまで文法的な表現に、(c) 古さが醸しだされる表現に、(d) 謙譲の気持ちのこもった表現に、といったもくろみである。ただし、かなり意識的にその意図を実現させようとすることもあろうし 無意識裡にはたらくのみという場合もあろう。

（ (a) 1.1 の〔1〕でみた「幸福たらしめる」「彷彿たらしめる」、(b) 1.1 の〔2〕

---

32 アンリ・フレエ(1929[1973]:12)のいう“意味的摩滅”にあたる。

の「喉をかわかさせる」、(c) 2.1.2 の「聞く者をあかせない」、(d) 1.1 の〔1〕の「一生懸命やらさせていただきます」)

なお、臨時的・一時的に生じたと思われる不整用法にも何らかの要因があろう。次のようなものが考えられるが、これらは上のふたつのそれぞれに関係しそうである。

○話線の混線や動詞の自他の勘違い。たとえば、1.2 の〔2〕の「貴方を飲みつぶさせる」「多江を我に返させる」および「子供をお使いにやらせる」。前者はかなりはっきり言い間違い(誤用)と感じられるが、後者にはそれほど不自然さがない。

○他の動詞からの干渉。きわめて個別的だが、2.1.1 の〔3〕の最後にあげた「娘たちの心臓を花咲かせる」「機関士の顎先に握り拳を埋め込ませる」など。

さて、このふたつの要因、「日本語のとくに動詞の性質についての話者の認識」と「発話に際しての話者の意図」は、それぞれを「言語そのものの性質に規定される〈言語側の要因〉」と「言語使用者の言語活動としての〈表現側の要因〉」ということもできるかもしれない。ふたつの要因の相互の関係は、話者が言語活動においてある特定の表現意図をいだき それを実現させるのにふさわしい手続きを 認識の中にある言語の性質のなかから探しだして用いるという関係なのだろうか、あるいは、話者に認識されている言語の性質が個々の言語活動において顕在化され刺激項となって 話者にある意図をいだくという反応をおこさせるのだろうか。本稿では、1節～3節でそれぞれの不整用法を考察する際に、どちらかといえば前者の立場で述べてきたが、後者の関係もやはり考えるべきだったろう。

〔2〕　ところで、不自然な用法・不整用法は、資料とした作品全体にわたって満遍なくみられるわけではなく、不自然な用法・不整用法が多くみられる作品にはかなり偏りがある。したがって、作品や作者の性質に根ざす要因も考慮する必要がある。気づかれるのは、地域差、時代差、外国語や古語の影響 である。

○ 地域差すなわち方言的変異。　今回の調査では作者の出身地や作品に描かれている場所などについての考察はほとんど行えなかった。ただごく個別に次のようなことが気づかれ、地域差の存在をうかがわせる。不自然な用法がかなりみられた作者のなかに島崎藤村と宮尾登美子があるが、それぞれ長野(信州)・高知(土佐)の出身であり、調べた作品では多くその地域でのできごとが描かれている。この二人は、使役にかかわる表現だけでなく、他の文法形式や語彙にも変わった例がしばしばみられることから、なんらかの影響が想定される。

○ 時代差すなわち通時的変化。　これについても積極的には何も考察できなかったが、気づかれることとして、たとえば2.1.2の「仏寺の庭が私をあかせない」や2.2の「長話が老いた父を疲らせる」が、誤りというよりは現代の感覚からしてやや古いと感じる程度といえる用例であること、補充資料のなかの司馬遼太郎『国盗り物語』に不自然な例がかなりみられたのは、この作品が戦国時代を扱ったものであることが影響していると思われること、などである。

○ 外国語の影響・古語の影響。　補充資料のなかの翻訳作品や田辺聖子『新源氏物語』、『小泉八雲集』に かなり不自然な用法がみられた。外国語や古語で書かれた原文があること、日本語を母語としない小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が書いたものであることなどの影響で、現代のふつうの用法とは異なる使い方が、意識的にか無意識裡にか、使われたということがあり得る。また、作品自体が翻訳や翻案でないにしても、作者が日本語以外の言語と接触することの多い人である場合には、そのことが作品の文体に影響をあたることが考えられ、「V-(s)aseru」の使い方も影響を受けるかもしれない。感想に過ぎないが、不自然な用法がみられた 永井荷風、和辻哲郎、大江健三郎、三島由紀夫、加藤周一など いずれも西洋文化にかなり接したいわゆる知識人である。

こういった、地域差(=方言的変異)や外国語の影響、時代差(=通時的変化)や古語の影響という空間的な要因、時間的な要因は、いわば空間的な言語接触、時間的な言語接触のからむ要因ともいえる。こういった面からも「V-(s)aseru」の使用について考察する必要がありそうである。

以上、不自然な用法をうみだす要因をいくつか考えてみた。より多くの用例を幅広く収集して検討すれば、個別の要因としてさらにいろいろあるだろうし、全体にかかわる要因としても、もっと別の角度からのとらえ方ができる可能性がある。作品の書かれた時代、作者の出身地、作品に描かれている世界の時代と地域などに留意したうえでデータの範囲を定め、新たに調べる必要がある。

4．3　不整用法と正用

話し手（書き手）が、表現しようとする事態をより明晰に言語化しようとして特定の明示的な形式を用いたり[33]、形態面の整合性をもとめてパラディグマティックな体系にふさわしい形式を選んだりしたとき、それがもし規範からはずれる形であれば、

33　釘貫亨(1990［1996］)に「(日本語の歴史の全般的趨勢をとらえた場合によく言われる総合的表現から分析的表現へという）流れは、不断に増大する伝達要求をいかに機能的に言語体系に再配置するのかという試みの積み重ねであった。」(1996:.277)

ふつうはその場限りの一時的・臨時的・個人的な誤用として消えていく。しかし、それがある内容を表すのに機能的・表現的にふさわしい形式であって聞き手（読み手）にもそのことがじゅうぶんに理解され、またその言語の体系のなかで落ち着いた位置をしめうるものである場合には、その形式はやがて自然なものとなり社会性を獲得して、その言語の体系の中に定着していく可能性がある。

この稿では、上にも述べたが、地域差、時代差、外国語や古語との関係など、空間的・時間的な要因についてまったく考慮することができなかった。現代日本語の標準語におけるある言語形式の使われ方の諸相をとらえるためには、そういった面から考察することもきわめて重要だと思われる。その分野の研究に学びつつ、これからの課題として考えていきたい。

参考文献

大槻文彦 1917 『口語法別記』（1980『口語法・同別記』勉誠社 に復刻所収）

釘貫亨 1990「上代語動詞における自他対応形式の史的展開」『国語論究２』和泉書院（釘貫亨 1996『古代日本語の形態変化』和泉書院に、「奈良時代語動詞における自他対応形式の史的展開」として再録）

国立国語研究所（西尾寅弥・宮島達夫）1971 『動詞・形容詞問題語用例集』秀英出版

国立国語研究所（宮島達夫）1972『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

阪倉篤義 1974 『改稿日本文法の話』教育出版

佐藤里美 1986 「使役構造の文ー人間の人間にたいするはたらきかけを表現するばあいー」言語学研究会編『ことばの科学１』むぎ書房

佐藤里美 1990 「使役構造の文(2)ー因果関係を表現するばあいー」言語学研究会編『ことばの科学４』むぎ書房

鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』むぎ書房

西尾寅弥 1954「動詞の派生についてー自他対立の型によるー」『国語学』17 集. 国語学会（西尾寅弥 1985『現代語彙の研究』明治書院、に再録）

バイイ，シャルル(Bally, Charles) 1935 *Le Langage et la Vie.*（小林英夫訳[1974]『言語活動と生活』岩波書店）

早津恵美子 1997 「使役動詞の認定をめぐって（１）ー形態面の問題ー」宮岡伯人・津曲敏郎編『環北太平洋の言語』第３号. 京都大学大学院文学研究科

早津恵美子 2001「使役動詞文と他動詞文」（京都大学言語学懇話会 2001 年 12 月 15 日 口頭発表資料）

フレエ，アンリ(Frei, Henri) 1929 *La Grammaire des Fautes.* （小林英夫訳[1973]『誤用の文法』みすず書房）
松下大三郎 1930『標準日本口語法』中文館書店（1961『標準日本口語法』白帝社. 1977 徳田政信編[増補校訂版]『増補校訂・標準日本口語文法』勉誠社）
三矢重松 1908 『高等日本文法』明治書院（1926 改訂増補 明治書院）
宮地敦子 1956「誤用ー「ガ」を中心としてー」『国語国文』25 巻 1 号.京都大学国語国文学会
湯澤幸吉郎 1934 「口語法精説」『国語科学講座Ⅵ 国語法』明治書院
湯澤幸吉郎 1944 『現代語法の諸問題』日本語教育振興会（1970 勉誠社より復刻）
湯澤幸吉郎 1951 『現代口語の実相』習文社
湯澤幸吉郎 1953 『口語法精説』明治書院（1977 明治書院より復刻）

用例出典一覧

基本資料とした作品８８作品を、小説と 随筆･評論 とに分け、作品の発表年順に示す。

《小説》６１作品

『野菊の墓』伊藤佐千夫（明治 39 年）岩波文庫
『蒲団』田山花袋（明治 40 年）新潮文庫
『坊っちゃん』夏目漱石（明治 40 年）新潮文庫
『それから』夏目漱石（明治 42 年）岩波文庫
『家（上・下)』島崎藤村（明治 43～44 年）新潮文庫
『こころ』夏目漱石（大正 3 年）角川文庫
『あらくれ』徳田秋声（大正 4 年）新潮文庫
『雁』森鷗外（大正 4 年）新潮文庫
『銀の匙』中勘助（大正 4 年）岩波文庫
『偸盗』芥川龍之介（大正 6 年）新潮文庫
『城の崎にて』志賀直哉（大正 7 年）新潮文庫
『或る女（上)』有島武郎（大正 8 年）新潮文庫
『和解』志賀直哉（大正 8 年）新潮文庫
『青銅の基督』長与善郎（大正 12 年）岩波文庫
『嵐』島崎藤村（昭和 2 年）岩波文庫
『蟹工船・一九二八.三.十九』小林多喜二（昭和 4 年）岩波文庫
『山椒魚』井伏鱒二（昭和 4 年）新潮文庫

『春琴抄』川端康成（昭和 8 年）新潮文庫
『墨東綺譚』永井荷風（昭和 12 年）岩波文庫
『くれない』佐多稲子（昭和 13 年）新潮文庫
『天の夕顔』中河与一（昭和 13 年）新潮文庫
『素足の娘』佐多稲子（昭和 15 年）新潮文庫
『菜穂子』堀辰雄（昭和 16 年）新潮文庫
『路傍の石』山本有三（昭和 16 年）新潮文庫
『青い山脈』石坂洋次郎（昭和 22 年）新潮文庫
『斜陽』太宰治（昭和 22 年）新潮文庫
『ビルマの竪琴』竹山道雄（昭和 23 年）新潮文庫
『雪国』川端康成（昭和 23 年）新潮文庫
『足摺岬・絵本』田宮虎彦（昭和 24～26 年）角川文庫
（収録作品：「足摺岬」「異母兄弟」「絵本」「霧の旗」「子別れ」「梅花抄」「幼女の声」）
『異形の者』武田泰淳（昭和 25 年）新潮文庫
『武蔵野夫人』大岡昇平（昭和 25 年）新潮文庫
『めし』林芙美子（昭和 26 年）新潮文庫
『海肌のにおい』武田泰淳（昭和 26 年）新潮文庫
『広場の孤独』堀田善衛（昭和 26 年）新潮文庫
『あすなろ物語』井上靖（昭和 29 年）新潮文庫
『潮騒』三島由紀夫（昭和 29 年）新潮文庫
『むらぎも』中野重治（昭和 29 年）文芸文庫
『張り込み』松本清張（昭和 30 年）新潮文庫
『金閣寺』三島由紀夫（昭和 31 年）新潮文庫
『流れる』幸田文（昭和 31 年）新潮文庫
『おとうと』幸田文（昭和 32 年）新潮文庫
『鳥』大江健三郎（昭和 33 年）新潮文庫
『鎖』 中里恒子（昭和 34 年）中公文庫
『宴のあと』三島由紀夫（昭和 35 年）新潮文庫
『花影』大岡昇平（昭和 36 年）新潮文庫
『聖少女』倉橋由美子（昭和 40 年）新潮文庫
『黒い雨』井伏鱒二（昭和 41 年）新潮文庫
『恋の巣』立原正秋（昭和 42 年）新潮文庫
『花霞』芝木好子（昭和 44 年）集英社文庫
『月山』森敦（昭和 49 年）文春文庫
『北帰行』外岡秀俊（昭和 51 年）河出文庫

『時雨の記』中里恒子（昭和52年）文春文庫
『夜の香り』古井由吉（昭和53年）福武書店
『彼方など』津島佑子（昭和54～56年）新潮文庫
（収録作品：「彼方」「野一面」「幻」「夢の道」）
『重い歳月』津村節子（昭和55年）新潮文庫
『鬼龍院花子の生涯』宮尾登美子（昭和55年）文芸文庫
『夜の橋』 藤沢周平（昭和56年）中公文庫

《随筆・エッセイ・評論》２７作品
『風土』和辻哲郎（昭和10年）岩波文庫
『アメリカと私』江藤淳（昭和40年）文春文庫
『おさなごを発見せよ』羽仁もと子（昭和40年）婦人之友社
『南太平洋の環礁にて』畑中幸子（昭和42年）岩波新書
『メキシコからの手紙』黒沼ユリ子（昭和42年）岩波新書
『羊の歌』加藤周一（昭和43年）岩波新書
『庭の山の木』庄野潤三（昭和48年）冬樹社
『花のある遠景』西江雅之（昭和50年）福武文庫
『田中正造の生涯』林竹二（昭和51年）講談社現代新書
『社会科学における人間』大塚久雄（昭和52年）岩波新書
『死刑囚の記録』加賀乙彦（昭和55年）中公新書
『指と耳で読む』本間一夫（昭和55年）岩波新書
『個人主義の運命』作田啓一（昭和56年）岩波新書
『ことばと国家』田中克彦（昭和56年）岩波新書
『死の思索』松浪信三郎（昭和58年）岩波新書
『寿岳文章集』寿岳文章（昭和58年）弥生書房
『貧困の精神病理』大平健（昭和61年）岩波書店
『「待ち」の子育て』山田桂子（昭和61年）農山漁村文化協会
『大鏡の人びと』渡辺実（昭和62年）中公新書
『女のこよみ』宮尾登美子（昭和62年）角川文庫
『中学校は、いま』望月一宏（昭和62年）岩波新書
『サーカス放浪記』宇根元由紀（平成１年）岩波新書
『男だって子育て』広岡守衛（平成２年）岩波新書
『障害児と教育』茂木俊彦（平成２年）岩波新書
『日本文化と個人主義』山崎正和（平成２年）中央公論社
『ルーマニアの小さな村から』みやこうせい（平成２年）ＮＨＫブックス

「V-(s)aseru」の不自然な用法をめぐって

早津恵美子

「要旨」

現代日本語における「V-(s)aseru」(「行かせる」「調べさせる」) の不自然な (誤用ともいえる) 用法について、主として 小説や評論などを資料として考察した。不自然な用法は形態面の特徴からいくつかのタイプに分けられる。そういった用法はいくつかの要因が複合的にかかわって生じたものと思われるが、諸要因は 言語そのものの側の要因と表現側の要因との大きくふたつに分けて考えることができる。

◆不自然な用法の諸タイプ

1　'-(s)ase-ru' による誤った派生

1.1　五段活用動詞を '-sase-ru' によって派生：　「白い顔を ほころばさせる」

1.2　使役接辞の過剰　：　「テーブルに 身体を 乗り出させる」

2　語末が -ase-ru となる動詞 (「～aseru」) のつくりだし

2.1　語末が -as-u の他動詞から「～aseru」をつくる

①「刷毛を 雨のしずくで 濡らせる」　②「女の杯に 酒を 満たせる」

③「歯を 鳴らせて うずくまる」　④「里子に 満足感を もたらせる」

2.2　【-e-ru : -as-u /-ase-ru】型の自他対応からの類推で「～aseru」をつくる

「湯呑みに 水を あふらせる」

3　サ変動詞からの「N/A-サセル」のつくりだし：「植物の生育を 助長させる」

◆不自然な用法をうみだす要因

○言語側の要因：　日本語のとくに動詞の性質についての話者の認識

・形態面での使役動詞らしさの認識

・「V-(s)aseru」と「V-(s)asu」との意味的同一性および、文体的相違

・自動詞ー他動詞ー使役動詞 の形態面でのパラディグマティックな体系性

・サ変動詞の自他のゆれ・動詞としての不安定さ

・特定の言語形式の待遇的・文体的性質

・広い意味での再帰性

○表現側の要因：　発話に際しての話者の意図

・"惹き起こし" の意味を維持・強化し より明晰に表現しようとする意図

・ 異なる形態によって異なる意味を表現しようとする異化の要求

・ なんらかの文体的特徴を帯びた表現をしようとする意図

○その他

・地域差 (=方言的変異)、時代差 (=通時的変化)、外国語や古語の影響

(受理日 2003 年 9 月 8 日 最終原稿受理日 2003 年 11 月 28 日)